



廣雅釋詁



三上香哉
禪本文城
編述

寬弘易知

花林塔
藏版
遷而堂



蘇軾詩集卷之十

蘇軾

文庫

文庫

春

明治二十一年三月廿一日
吉田 貞吉 題



國形改のさゝおとらふ事知るは貨幣一永元三年
去の古泉を集むる國改の書衰成志ん
と傳ふすれはあり徳川氏幕府平ひきり寛永永元
何免りて交存の末年いふ事て各所を泉
貨成鑄造せし中平 寛永天保文久あり此
轉文の事とおけむね寛永通寶の文字を鑄出
つまふ事て寛永錢といふ事ナリ種款いふ
中平一にて布一々姉屋柳高寺聖高の藤原
貞幹朽木就橋ついで芳川雅堅 稻垣為友
等此の事いふ 銅貨量同鑄造の事いふ事地名を

考へて之を承つらひ泉録泉譜を著せし考は
いふ所なき所なきなり。表行の所ありて
我友板本三三の事氏ふまひりの説さるる
はみまは録等をあきりしよ。つげある泉志哉
たつひんそらねぬ六の事みはよ古泉をいつた
ひとの事あり。此みまは河原幕府の盛衰を知
る史料ともありてめきたき。ちりみまはつら
り一文かくとく。一。多事。三。年。一。録。ん
明治三十年。秋。極園のつ。一。武香



寛永泉志はしがき

あの寛永泉志てふ語み、わが邦明正天皇の御時、徳川家光の政執り行
ひし、寛永十三年公に寛永通寶といへる錢貨を鑄て、世の需用に充られ
たる、その錢お就てのこをなかりとるなり。後水尾天皇の御宇寛永三年に鑄しものあかれ
とこ、にいそす。あの錢のもと末おつきて、い知れがたきふし多きも、古よりもの
したるふみとて、いなくて、たゞ譜といふもの一ッあるのみ、参考ふへき
ものさへなければ、かくて止みなんに、後ち遂に人に知られずして過
き果んことのかなしくも思ふものから、しり得んかきりつはらに論ふ
ひしるして、後の世にのこさまほしう、とかうかきなしたれども、元より
才薄く學ひたらざる已れらなるから、杜撰のこをいひとさはならんか
しねがぬは見ん人その心して繕きたははらんことを。
今しもこ、に、夏が邦の貨幣の過こ一方のありさまを説きもて行く、
世の人にかくてぞこの寛永通寶錢の造り出されぬよとの故よりを
いらせまほしう思へはなり、抑も貨幣の起り、上れる代は物を交換る

に稻布などをもちて媒介とせしは始りしより、史より顯宗天皇の御代に
銀錢といふこと見ゆ、天武天皇の御代は鑄錢司を置かき、また銀錢銅錢
のことしるしありといへども、名こそ錢といへ、鑄なりたるも此より
あらで、たゞうちひらめたるものに、もの、かた印せるのみなりしな
り。正しく唐土の制にならひて錢を鑄し、元明天皇の御代に置かれし
鑄錢司にて作り出したる和同開珎といふ錢を創めたりける。後ち村上
天皇の御代しらしめ、天徳二年に、乾元大寶といふ錢を鑄られたるま
で、おのしな十あまり四ツなりしも、桓武天皇の御代は隆平永寶といふ
る錢を鑄し、後よりしてわが邦の銅の産額年々に減り行くより、新たよ
錢の出る毎に形ち小やかになりゆきて、うれ末なる乾元大寶乃如き鉛
もて鑄あるさへありて、民れいとふ心を取ぐさむるよし取く、此ちに
は鑄錢司といへる官は各乃ミのものといひ取りぬ。この錢鑄ること絶
はしより後、黄金白銀のおのま、なるを用ゆること、なりて、多くの
額を受けつ授けつする折に、便り取るも、少なき用に充はるに、もろ

こしの錢をもちひしなり、この唐土の錢は、形ち大きやかにかたも
いかめしげなれば、なべて世の人よろこびて、ひとぶるみ之をもてはや
しけれバ、後ちに、おのづからわが日の本の法貨とも見ゆべくそなれ
りける。後鳥羽天皇は、大御心は深くこの事をかひなしとや思ひめされ
けん、建久四年といふにかたく宋朝錢の通用をとめられしかば、志は
らく舶路絶えて錢はやうく少なるをなりしける。後醍醐天皇も同じ
大御心にて、うか上は天徳このかた事止みし鑄錢司を再び興し、建武二
年といふに乾坤通寶といふ錢を鑄さしめらるるに、いともかしこき
御心とこそおもすべけれ、されどこの錢今の世に傳はらざれば、さのみ
は鑄出されざりしにや、はた銅の産額も少なかりけん、楮幣もこの御代
よりはしほりしとぞ、後ち錢はますます乏しかりきは足利氏の時に
はたりては、もろこしへ人をつかえし、かの國の錢を請ひもとめてわが
邦に布くこと、はなしぬ。後小松天皇の御代應永といふ年の中に、相摸
の國にて明國の錢永樂通寶を數多く得たることありて、關の東の國々

この紙を用ひ居けるが、夫すら年々四方へ散り行きてその數いと少
なりけり。天文年中にいたりて、鏝てふ薄平らめなる錢を民ども
鑄出し交ひ用ひけるに、商人のともがら受け渡しする折なんどにうの
よしあしを論らひいさかひ止むまなかりければ、北條氏康關の東の
八州を治めし時、錢ハ永樂乃外をな用むと制せしかは、いさかひもや
がてやみしとす。正親町天皇ハ御代天正といふ年ハ中ニ織田信長砂金
れわづらひしきをさとりて、大判金とて始めて形ちせる黄金を作り出
し、よりこゝニ創めてわか邦本位ハ貨幣ハ定りぬ。豊臣秀吉も亦之
よならむて判金を作るのみかハ、天正通寶文録通寶といへる、黄金白銀
赤銅ハ錢をも作り出しぬ、是ハ建久建武の大詔をかしくみて、おのれか
邦の用をなすに他の國のたからをゑのまじとの、いと雄々しき心より
とす聞ゆ。徳川家康もまた是の心をつぎて、慶長といふ年の間、小判
金といふを作りはじめ、同じ十三年に、鏝とて國の寶なり用ひざるよど
やあるをのむ糸を領し、うらうへに永樂通寶錢の行用をさへ禁めし

かども、久しきに慣きし民の心にかなひで、とやかく錢のよしあしを
擇らむことしきりよ起りぬ。この年慶長通寶を鑄。元和五年に元和通寶
を鑄たれども、思むはかりたる如くならずやありけんいく進ばくもな
くて事止みぬ。それ人の錢ある事猶やまずしてかしはしけ紙は、あま
た、びすはじきよしを觸れしめせしかどもさらよろのかひなかりは
るにす、さてはよき錢あまも鑄出して、所しき錢ハ心をとめざらしめん
にハ、徳川家光寛永十三年よはじめて寛永通寶錢を鑄出して盛ニ世
の用に充られしなり。これすこの錢の、世よ作り出されたる事のあらま
しむなんありける。

寛永年中に公に許されたる錢座を、いふしへハ淺草、奈良、松本、芝、坂本、吉
田、足洗と次序したれども、くさくさのふみとも考へ合せて、今こゝにハ
水戸、淺草、芝、坂本、松本、吉田、奈良と定めぬ。あの年の間に作りしものハ、風
趣おとなびて銅質よろゑく、その年の末つかたにハ、いたくかろめのも
のを鑄し所ありて、夫よならひてとりく省量の錢をくりければ、公

よても、かくての程のはじめの心にもせるとて、遂に國々乃錢座をことごとく廢められけるとなり。又それ時代につれていなのかへり行くおとゞも、はきく程の條にはきて、つはらに論らふ所あるべし。

明治三十年季の秋

編者

進而堂 文城 がいるす
花林塔 香哉

凡例

一 寛永泉志を編成するに當りて、其の原本となせしものは、寛政七年の秋、浪花の錢商芳川維堅、京に上りて、藤、源、二氏の愛錢を借りて、搦摸せしといふ、稿本寛永錢譜本文に藤譜とあるは此の稿本をいふなれども、其の稿本たるや、今日より見れば、事實の誤る所も多ければ、諸書を參酌して、大に訂正をなしたり、されは殆ど原影を、とゞめずなりぬ。

一 寛永泉志を分ちて、七卷となり、其乃一卷は、寛永三年と、同十三年と開設せられたる錢座の錢貨。其の二卷は、寛永十四年と、明暦年間と開設せられたる錢座の錢貨。其の三卷には、寛文より享保年間に至るの錢貨。其れ四卷は、元文年間の錢貨。其の五卷は、寛保以後の錢貨。其の六卷は、當四錢貨。其れ七卷は、御用錢、祝賀錢、私鑄錢、備考錢の類を載す。

一寛永泉志に載せるものは、座錢にして通用せしものに限るといへども、母錢のみにして、未だ其通貨を見ざるものも載せり。

一寛永泉志に載せる所の錢貨の順序は、錢貨鑄造の年月に據るものなり、されど其の年月の未だ詳かならざるものは、年月明かなるもの、終りに附す。

一寛永泉志の錢圖は、字畫を明かならしめんが爲めに、母錢よりとりたる摺摸を用ゐたれば、通貨に比すれば、稍々形の大なるものなり、されど又錢型縮小の度をも知らざめんと、ほりして、通貨のものをも交へたり。

一寛永泉志に載する所の錢貨の名稱は、新たに命名なしあるもの、外は、皆な先人の定る所を従ふ、されど其の名稱たるや、甚だ不穩當を認る所なるものも亦なきあり、あらざれば、改稱せまほしけきと、一の錢

貨は二名あるは、後人をして、惑はしむるの恐きあれば、私しよ改めぬこと、なすぬ。

一寛永泉志に載する所の錢圖の傍らに、一より十に至るの、數字を記したるは、今日世上に存在する、錢貨の多少を知らしめんが爲めに、階級を附したるものなり、よかして其の一とあるは、存在稀れなるものにして、其の十とあるは存在いと多きものと知るべし。

一寛永泉志に載する所の錢貨は、諸書を改削取捨して、つとめて多くの種類を撰みたり、されど尙ほはた誤脱あるやもは知るべからざれば、後の泉家よく之を校正するあるを幸甚。

編者識

寛永泉志 一卷

花林塔三上香哉
進而堂榎本文城
編述

公 爐 錢

寛永通寶錢は、常陸國水戸に於て、佐藤新助なるもの
寛永三年に、始て鑄造せしものよて、其面文を寛永通
寶と撰定せしハ、蓋し其當時の年號を移し用ゆる、内
外錢貨の先例に據りたるものなるべし。

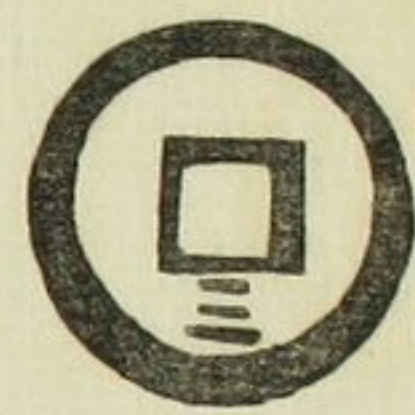
○寛永三年水戸座所鑄錢

藤譜に「寛永十三年前所鑄、鑄所未詳」とあれども、常陸史料に「寛永二年水

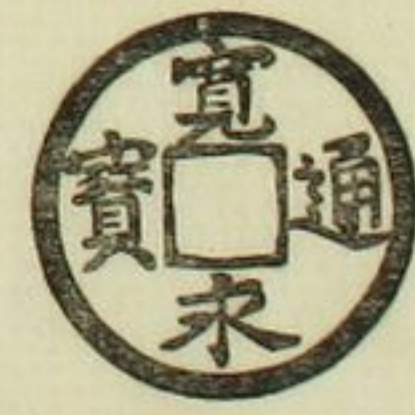
戸田町佐藤新助、請鑄新錢充世用、水戸候許之、乃詣大府又請報可、於是於水藩、新鑄寛永錢、是鑄寛永錢之始也」と又金錢米布江水通貨考にも「寛永二年新錢鑄立願、江戸相濟錢座取立云々」とあり、されど背の一字を置きたるより考ふれば、寛永二年より許可を得て、寛永三年より鑄造なしたるものならん、故に寛永三年常陸國水戸に於て鑄る所のものとなす。

寛永水戸錢

四 背 文 三



五 同 上 廣 三



藤譜よかくの如き書体の永字を説明して、「以二從水」と故に人之を二水永といふ。背の年數の文字を置くは南宋の諸錢に見るとるよして我朝に在りては此の錢を以て嚆矢ありとす。

○寛永十三年水戸座所鑄錢

常陸史料に「寛永十二年佐藤新助子、清兵衛及江戸買人三久保屋三右衛

門又請、鑄干水戸下町之烟草町」と、又金錢米布江水通貨考にも「寛永十二年又相願江戸町人三久保屋甚右衛門、新錢元祖の旨、願立相濟、水戸にて新錢大分造り出す」とあり、されど背の十三の二字を置きたるより考ふれば、寛永十二年より許可を得て、同十三年より鑄造をしたるものあらん、故に寛永十三年常陸國水戸烟草町に於て、鑄る所のものとなす。

寛永水戸錢

三 背 文 十 三

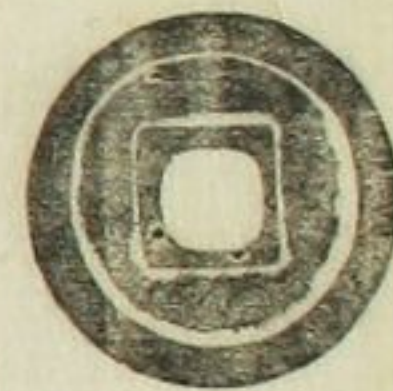


○年月未勘水戸座所鑄錢

藤譜に「寛永十三年以前所鑄、鑄所未詳」とあり、さしを此の錢、背文三字錢に酷肖せるが故に、水戸座のものあることは、明かなれども、寛永三年のものなるかは、十四年以後のものあるか、未だ詳かからず。

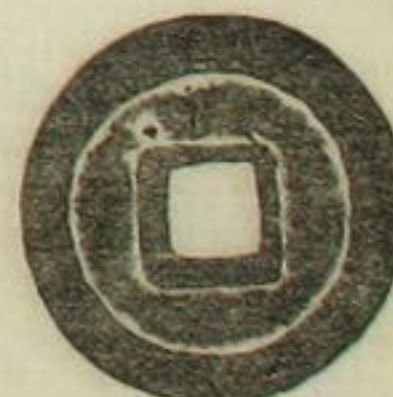
年月未勘錢

細縁



同上

縮潤字縁



水戸の錢座も、寛永十七年まで鑄錢なし居りたるものなりといへば、二水手諸錢を皆水戸座のものとするも、かゝる少數ふいあつざるべし、必せや他の面文のものもあつんをさども、未だ十分の証跡をえねば、止むべくこゝよといひぬ。

○年月所鑄座未勘錢

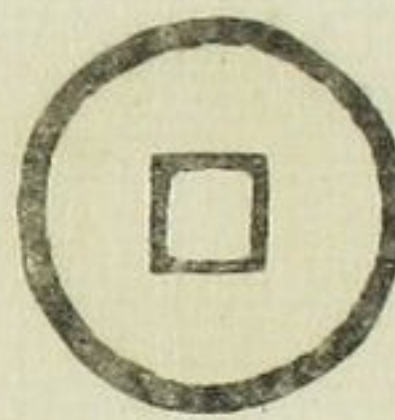
藤譜に「寛永十三年以前所鑄、鑄所未詳」と又和漢泉彙にも「錢座免許ノ前

ニ所鑄ト」とありて、今に年月、鑄地、の詳かならざるものあり、されどはた

水戸座のものと思はるゝものもあれど、尙ほ暫く未詳のものゝあす。

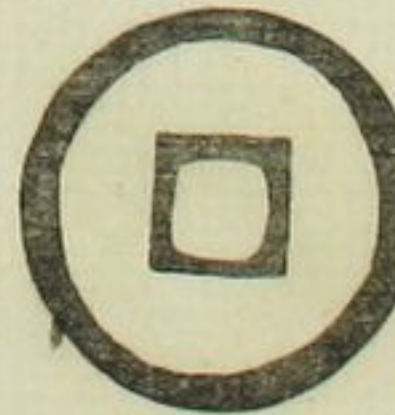
未勘錢

元和手



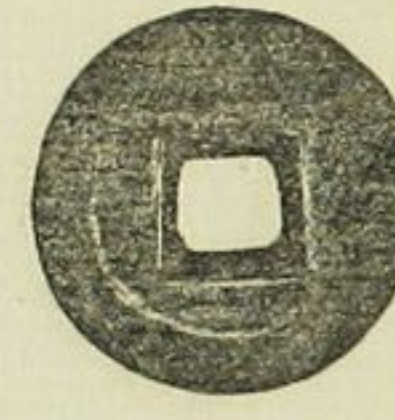
同上

永樂手



同上

太平手



同上

開元手



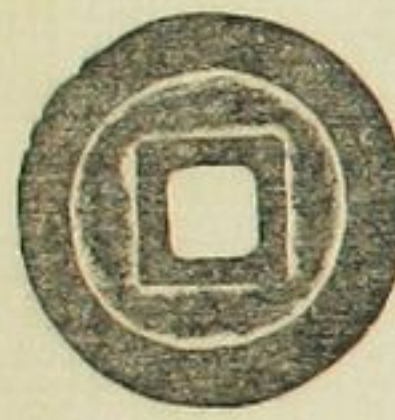
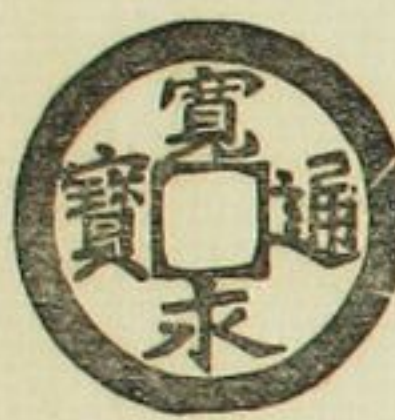
元和手、永樂手、太平手、開元手、の四品は、我朝の元和通寶、明の永樂通寶、宋の太平通寶、唐の開元通寶の文字を模擬したるものあり、故に其の名あり。

古人の二水手寛永錢を、初鑄のものどあしたり、何れ據りて期く認めたるかえ知るべからざれども、文字頗る閑雅にして愛すべく、製作又素朴にして古情の掬すべきあり、まかのみならず寛永時代の金石文を見るに、永字二を以て水は従ふもの多し、故に二水手寛永錢は、寛永古期のものたるを知る。

背の穿上よ一の圖点あるものを、人呼んで星文錢といふ、何れ故まかゝるものを圖したるものあるか、未だ詳かならざれども、恐くは漢錢の背に、往々見るところの月星の星をとりたるものあつん。

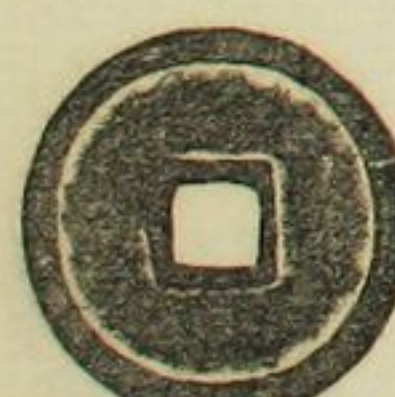
同上

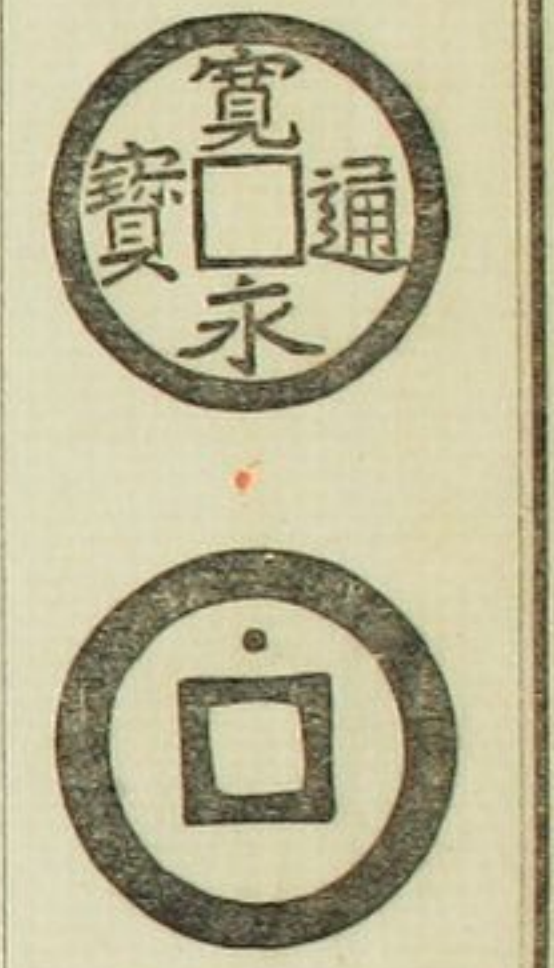
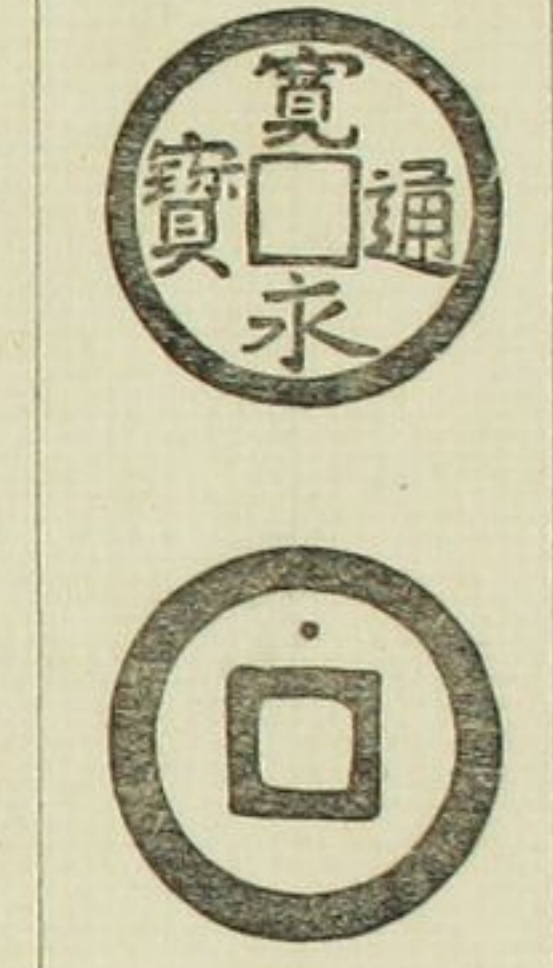


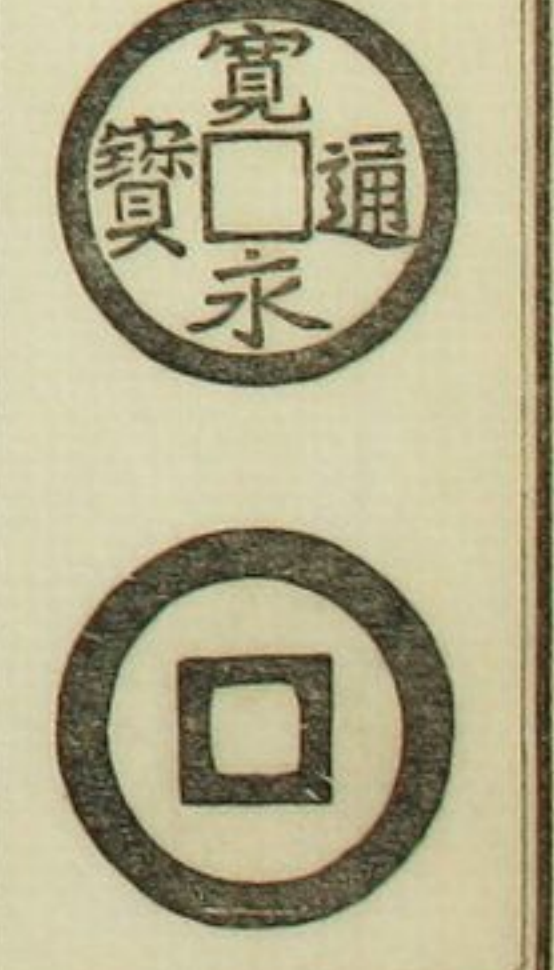
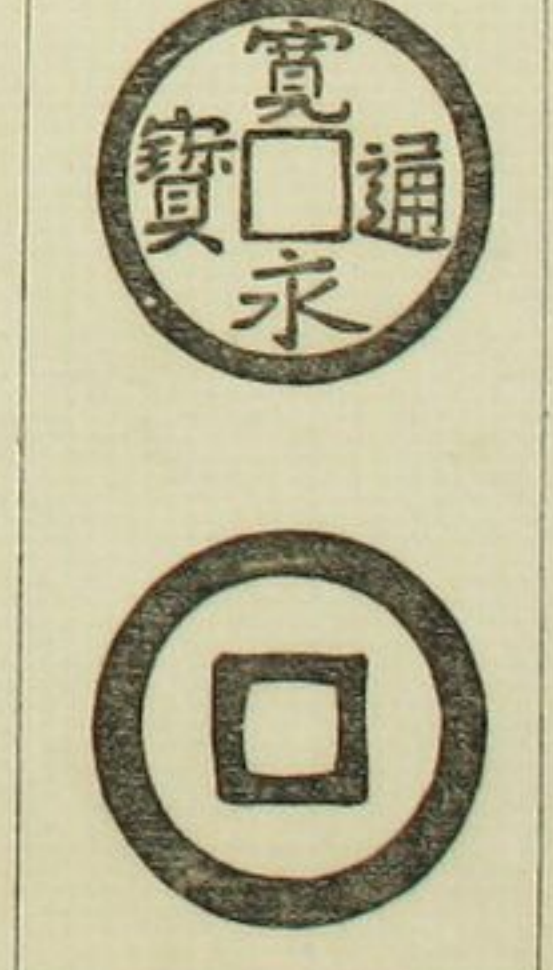

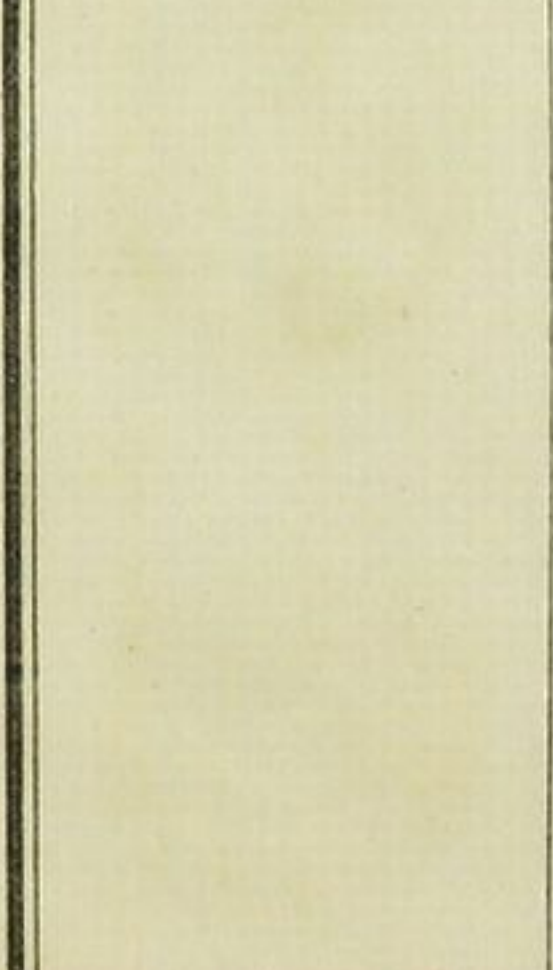
潤縁



同上

短寶



<p>末勘錢 五 星背文 同 上</p> 	<p>五 小同字 同 上</p> 	<p>三 長字 同 上</p> 	<p>三 大寶 同 上</p> 
<p>四 同 上 無背文</p> 	<p>四 同 上 無背文</p> 	<p>五 同 上 狹永</p> 	<p>五 同 上 永</p> 

されど幕府の新錢鑄造所を設置せしむ、寛永十三年五月のことありとす、いま幕府の法令を見るよ。

定

一 寛永の新錢并古錢共々、金子一兩ハ四貫文、勿論一分ハ一貫文の賣買たるべし、若し違背致し、高下の賣買仕ハ於ては、從令双方其賣買の代一倍過料として可出之、其町之年寄二百疋、其外家一軒より拾疋づ、過怠として可出之事。

一 大かけ、かたなし、ころ錢、なまり錢、新惡錢、此外不可撰、若撰者、六錢を押而遣者有之者、或ハ其所ハ三日さくし、或ハ可爲籠舍、其町の過料は右同前之事。

一 新錢、江戸并近江國坂本ハ而、被仰付候間、兩所之外惡錢ハ至る迄、一切不可鑄出、若し背族ハ可爲曲事之事。

一今度新錢被仰付上は假令有來錢たりといふ共、或は禮錢、或は散錢等
も不可取扱事。

一御領、私領共、年貢收納等も、此御定之通り不可相背事。
右之條々堅可相守之者也

寛永十三年丙子六月一日

此の法令よりて見るときは、寛永十三年より新錢鑄
造所を置かれたるは武藏國江戸及び近江國坂本の
二ヶ國のみにてありしこと、明かなることなりとす。

寛永十三年至十七年淺草座所鑄錢

江戸淺草の錢座ハ、藤譜よりきは「寛永十三年至明曆中、江戸淺草所鑄」と
あれども、うは誤りあり、彼の寛永錢録より「各國所鑄多輕薄、寛永十七年八
月各國之錢悉禁止勿鑄」と、又幕府の法令も、寛永十七年八月に各國の

鑄錢を禁ずる事令あり、されど尙ほ各國にて、窃か小鑄錢をすもの多か
りけん、寛永二十年二月二日更し「新錢鑄候事堅ク御制禁也」と令せり又

寛永錢録より「其後有私鑄、寛永二十年二月、令各國停止鼓鑄」とあるを見

せば、明曆年間まで繼續せしものみはあらで、寛永十七年八月ハ淺草の

錢座も、停止せられたるものあり鑄錢停止のことは寛永年間より置
かれたる錢座の各條より通ず。かく一時ハ、各

國の鑄錢を停止して、私鑄錢の取締りをなしたれども、忽しして又、錢貨

の不足を來せしかば、明曆元年ハ至り、再び錢座の鑄錢を許したるもの

あらん、されは貞幹ハ明曆年間ハ錢座のありたることのみを知りて、寛

永十七年ハ停止せられたることを、知らざりしものあり、しかして又「寛

永錢録ハ「寛永十三年五月鑄于江戸、盖御藏錢者也」と、和漢泉彙ハ「明正

天皇御宇、大猷君御治世、寛永十三年丙子五月錢座免許」と續化蝶類苑ハ

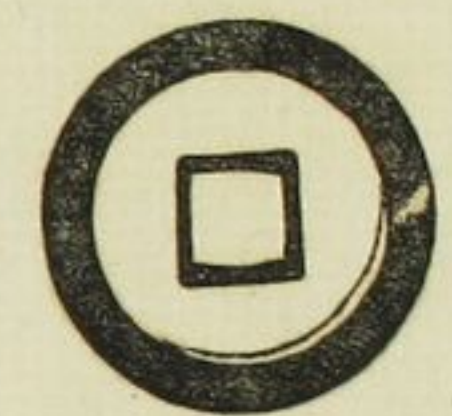
も寛永十三年五月初テ錢座へ被仰付江戸淺草橋場ニテ鑄之」とあり、故

に寛永淺草錢は、寛永十三年五月より、同十七年八月に至るの間、武藏國江戸淺草橋場に於て鑄る所のものとなす。

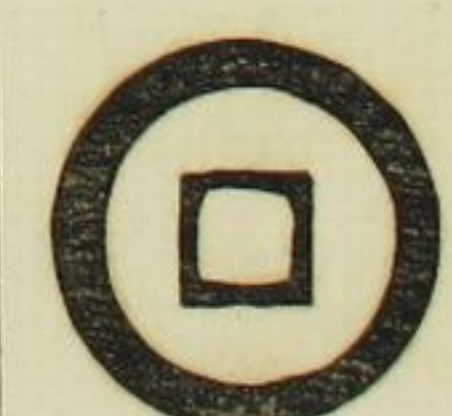
此の座の受負人は、秋田屋小左衛門、末吉與右衛門、丸田屋文右衛門あり。次は圖を志津磨百手といひて、種類のこと多き錢あるをば、悉くこれを圖よせんと思へども、割刷は過つて、却て眞は遠ざかることもやあるを恐るをば、其の鑑別をし易きもの、みを撰びて載す。御藏錢といへる名は、幕府の御藏に納め置きて時々拂下つをたるよより起る。

寛永淺草錢

正字



同 上
短尾 永 上



同 上
長点 通 上



同 上
小 同 上
字 上



同 上 挑 同 上 永 上	同 上 外 同 上 跳 寬 上	同 上 大 同 上 字 上	同 上 肥 上 字
同 上 昂 同 上 永 上	同 上 同 上 細 字 上	同 上 同 上 仰 永 上	同 上 永 草 点 上

六 同 離同 点上 永上	六 同 小上 永	七 同 外同 跳寬 上	八 同 橫同 点上 永上
七 同 小同 玉寶 上	六 同 大同 頭通 上	七 同 同同 上小 字上	七 同 肥同 字上

八 同 二同 草点 上	八 同 永同 草点 上	八 同 大上 永	八 同 寬永 濶同 淺草 錢字 上
七 同 三同 草点 上	八 同 通同 草点 上	七 同 直同 点上 永上	七 同 同同 上俯 寬上

八 同 二 草 点 上	八 同 細 同 字 上	七 同 外 跳 寬 上	八 同 寬 永 淺 草 錢 仰 同 永 上
七 同 三 草 点 上	八 同 永 同 草 点 上	六 同 內 跳 寬 上	七 同 橫 同 点 永 上

五 同 狹 穿 上	六 同 背 細 緣 上	二 同 大 同 字 上	六 同 長 同 足 寬 上

次は圖する所の志津磨大字の二品は、瀬尾柳齋の泉譜に佐々木志津磨の書とある所のものとして世人之を柳齋大字といふ。

瀬尾柳齋は享保年間の大家として延寶元年浪花に生る。

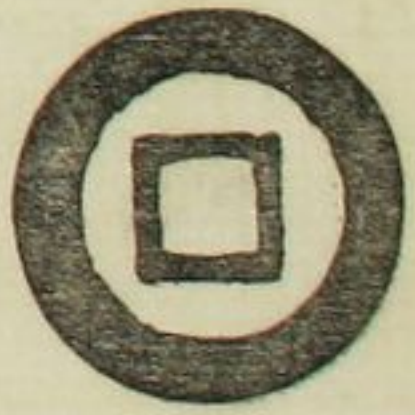
佐々木志津磨は、俗彌七兵衛、松竹堂専念翁と号す、加賀の人あり、初め書法を加茂敦直に受け後ち研究して一派をなす、世に志津磨流と稱するものこれあり、元祿八年正月十九日歿す、歳七十三。

他は志津磨と稱するもの三人あり、一は名は春、字専林、寛保中浪花に終る。二は命常、文龍と号し、十藏とす。三は澤井穿石、浪花に住す。皆とも志津磨と稱し又松竹堂と號す、されど寛永錢の面文を書せしといふは、俗彌七兵衛といへるものあり。

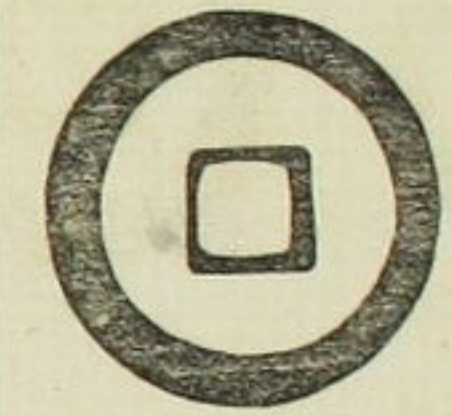
四 寛永淺草錢
大志津磨
字



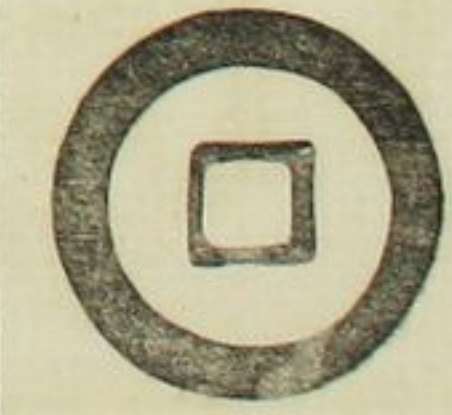
四 同
斜同
玉寶上



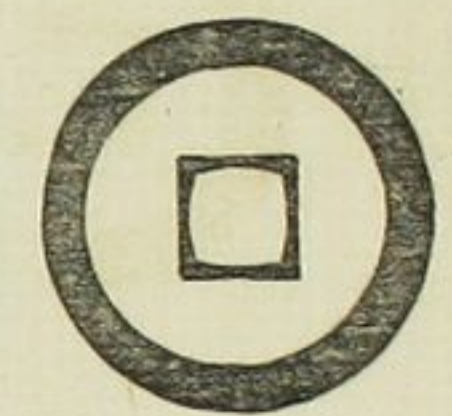
五 同
肥上
永



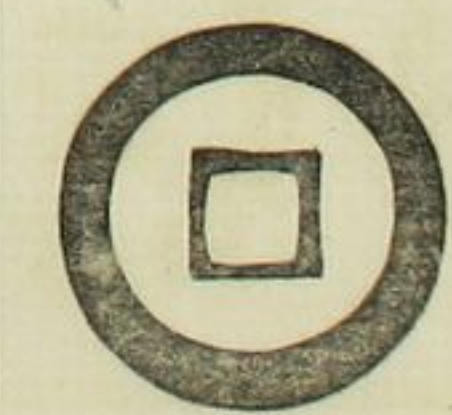
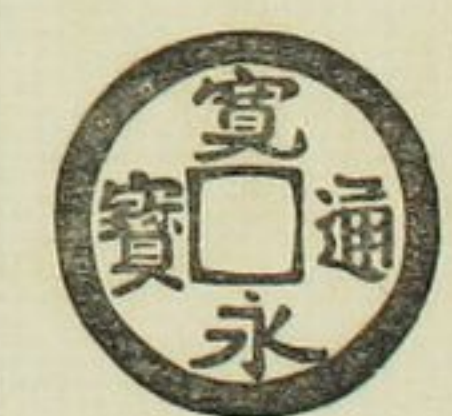
六 同
小同
字上



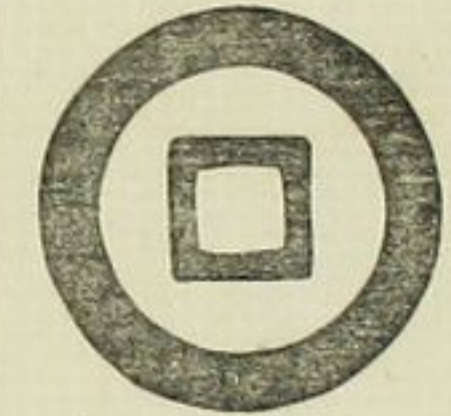
八 同
降同
寶上



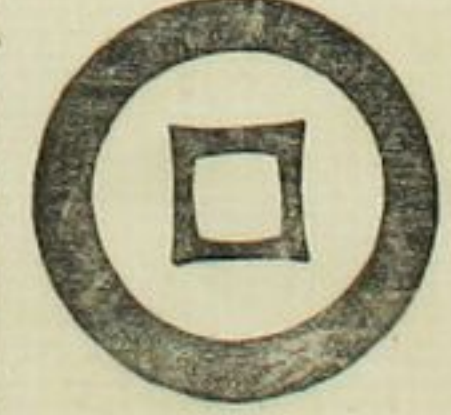
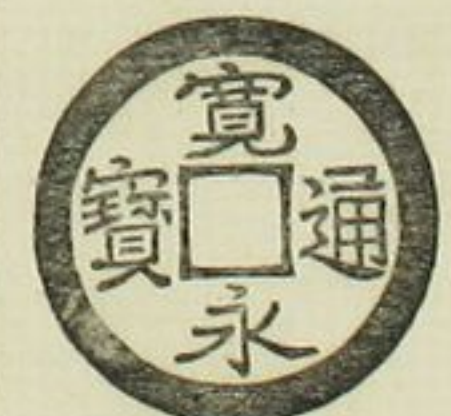
七 同
同
同上仰頭通上



十 同
二草点
上



九 同
背同
反郭上

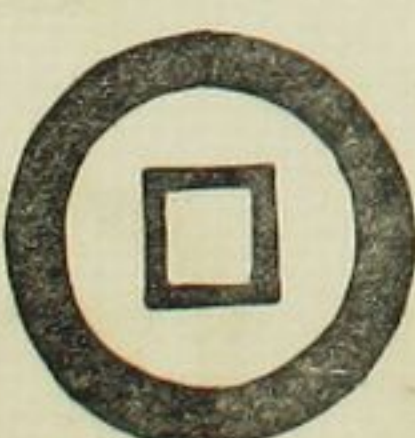


肥永ハ昔より、遒勁異通ともいふ。
二草点の二品は、世人番無背錢といふ、蓋し此の面文よして、背よ一より十六に至る
の數字あるものあるが故あつん。

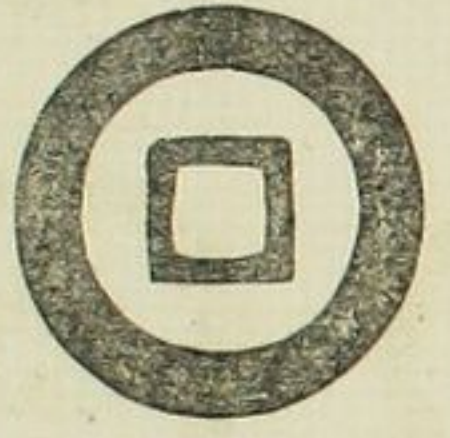
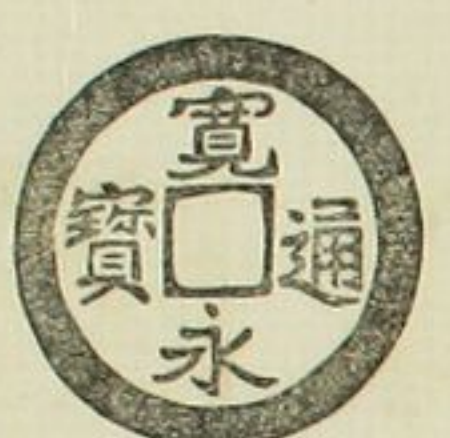
九 同
星背
文上



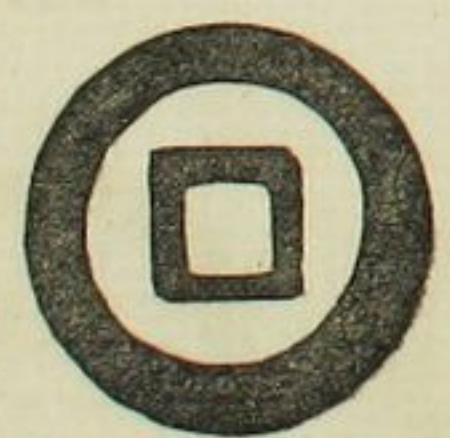
九 同
星同
刮去上



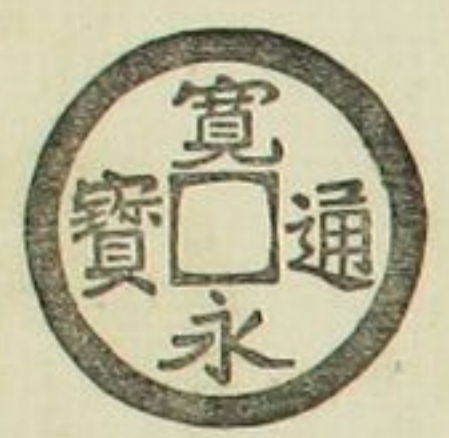
八 同
無星
文上



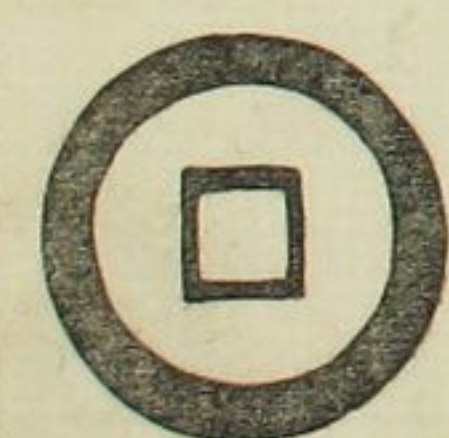
八 同
俯同
字上



七 同
正上
字



七 同
背同
長郭上



かく新に幕府の命よりて、出でたる錢貨も亦寛永

通寶と撰定せられしハ、同トク時の年號よりとる、錢文撰定の先例よりたるものならん、されど寶曆十二年鳴見平藏の書上は「上畧新撰之置字、將又吹座之場所、錢造鑄物師等、大僧正御心ノ儘タルベシト也、右ノ上意ヲ御受、東叡山ノ寺號ト云、當時ノ年號ト云、寛永通寶未代不改之錢可然云々」とあり、これ容易ヨ信を置き難きことより、何れぞ、そはとよかく改元の度毎に、其の面文を新ヨ撰まざりしハ、孝するといふの意あどより、錢制をも改めざりしものあらん、彼の徳川十五代史も、さる心よりして漫りヨ法令を改めざりしよ見わたたり。

○寛永十三年至十七年芝座所鑄錢

藤譜云「寛永十三年江戸芝所鑄、銅質紫褐、徑八分強、重九分有二種」とあり、又泉貨鑑云「寛永十三年武州芝新錢座ニ於テコレヲ鑄中畧近世鑄ル所ノ寛永新錢ハ多ク此字体ヲ用ユ故ニ後世鑄ルモノト混雜シテ見分ケ難シ」と又鳴見平藏の書上も「上畧尤吹座之儀御瑞夢之方角ニ任從、御城南之方ニ當テ、場所御見立、芝綱繩手ニ吹今新錢座古名ナリ此節土井大炊頭様へ被召出、錢座頭領本人ニ被仰付、則試錢百貫文鑄立奉差上候云々」とあれは寛永十三年六月より同十七年八月に至るの間、武藏國江戸芝新錢座町今新錢座古名ナリ於て、鑄る所のものとす。

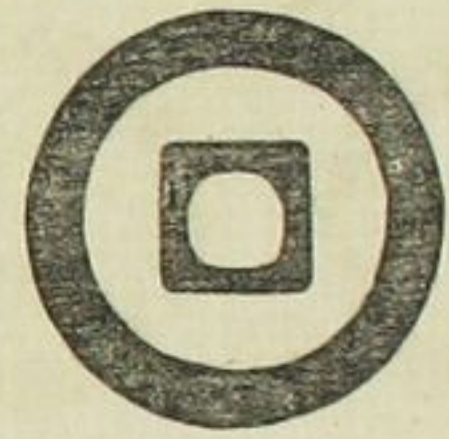
此の錢座の受負人は、麩屋又右衛門、郡司兵右衛門あり。
貨幣秘録云「寛永十三年丙子六月、銀座役人秋田宗古に命せられ、芝濱手及び江州坂本に於て、新た錢座を立、始て銅錢を鑄る、是を寛永通寶といふ。或書曰六月朔日より通用被仰出、石谷十藏鑑之、一説は此時天海僧正の吹舉に依て、鳴見兵庫賢信といふ者、鑄錢の事を命せらる賢信、頓て芝綱手錢座を立て、初て鑄錢百貫文を鑄て奉る」とあり。
寶曆十二年鳴見平藏の書上は「笠綱繩手」とある者もあれど、恐くハ芝綱手の轉寫の誤りあるん。

和漢泉貨「江戸芝新錢座ニテ鑄ル所ハ南光坊天海ノ書ト云」と又續化蝶類苑にも「江戸芝新錢座、面文二様、此書慈眼大師」とあり。

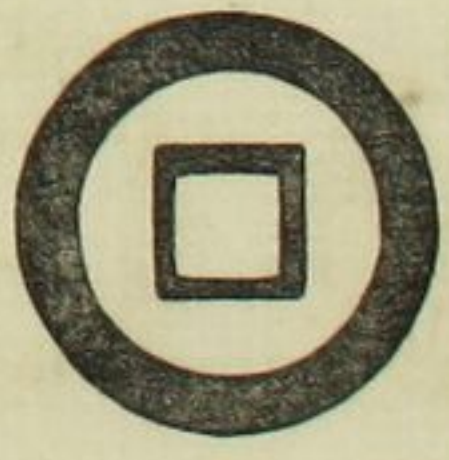
天海大僧正は、陸奥國會津郡高田の人、足利義澄の末子、母は蘆名盛高の女、永正七年に生る父の薨るるふ及び母と、もに會津に到り、天台宗に入りて剃髮し、南光坊天海と稱す、武藏國江戸崎不動院の住持たり、慶長十七年四月十九日仙波喜多院の住職とあり、後ち東叡山寛永寺を開て、大僧正に任し、寛永十九年十月二日寂せ、歳百三十四、慶安元年四月、慈眼大師と諡す。

寛永芝錢

四 廣 寬

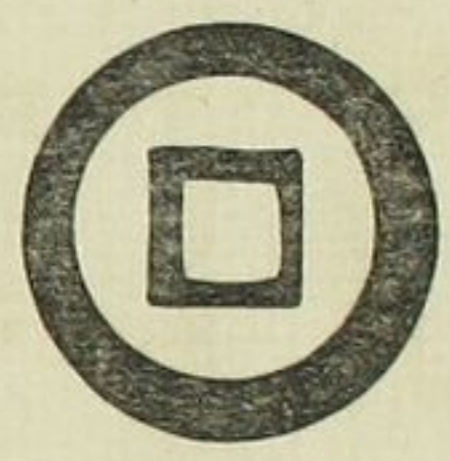


十 同 上
短足 寬



同上

十 狹 寬



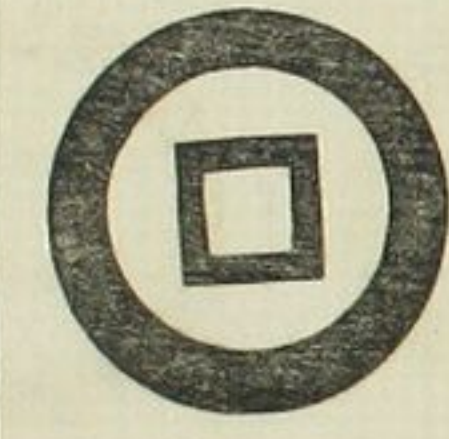
芝の錢座は淺草錢座の次ニ開設せられたるものにて、江戸の錢座は淺草を以て本錢座となす。

○寛永十三年至十七年坂本座所鑄錢

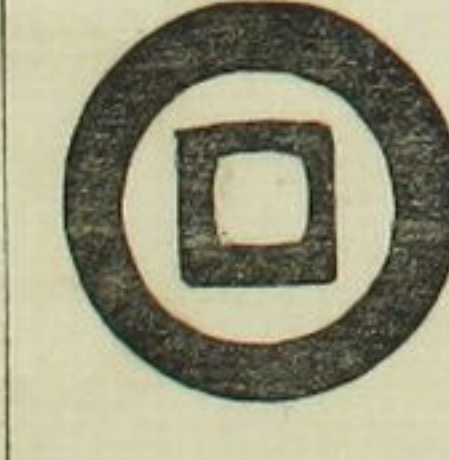
藤譜「寛永十三年近江國坂本所鑄、銅色黃濁、徑八分強、重一匁、有二種」と又新錢座設置の布令も、寛永十三年とあり、故ニ寛永十三年六月より同十七年八月に至るの間、近江國坂本に於て、鑄る所のものとなす。

寛永坂本錢

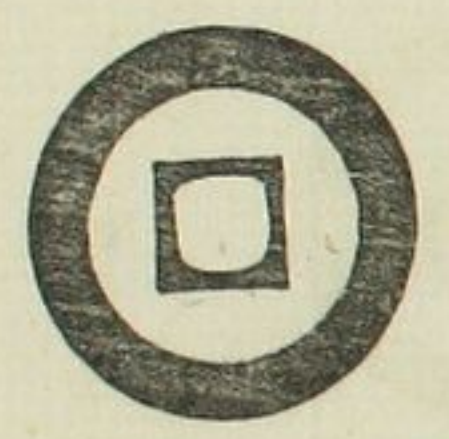
九 草 永



八 同 上
背 廣 郭



二 同 上
潤 緣 上



八 同 上
不 挑 永



此の錢座の監督は、石谷左近監貞清あり。この錢の書体にして、寛文の頃鑄たりといふ粗惡の私鑄錢あり、よく銅質製作に注目して、寛永年間のものと同と混同することおかれ。

かく幕府の英断をもて、こゝよ一の錢制を新定し、始て全國一定の錢貨を視るよ至れり。

寛永泉志 一巻 畢



田中嘯石刻

明治三十年十一月五日印刷
同 年十一月十二日發行

定價金五拾錢

著作兼發行者

東京市日本橋區
濱町二丁目十一番地

榎本文四郎



印刷者

東京市日本橋區
蠣壳町三丁目五番地

法木徳兵衛

印刷所

同

法木印刷所

賣捌所

東京市日本橋區濱町
二丁目拾一番地榎本方

寛永泉研究會事務所

廣
水
泉
志
三
卷

廣水泉志
卷一

三上香哉
編述
禱本文城

寬弘元年

花林塔
藏版
遷而堂



明治以來萬物新泉家社



後亦通神異同毫末分多

少寬永錢中出寶珠



右勺中用寬永通寶四字
賦七絕代寬多泉志序

明治三十一年一月一日杏雨老人芳



Handwritten text in a cursive style, likely a preface or inscription, enclosed in a rectangular border. The text is written vertically from right to left in approximately 10 columns. The characters are highly stylized and difficult to decipher without specialized knowledge of the calligraphic style.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a single column and is enclosed in a rectangular border. The script is highly stylized and difficult to decipher without a key.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a single column and is enclosed in a rectangular border. The script is highly stylized and difficult to decipher without a key.

一寛永泉志二卷には寛永十四年より明暦年間に至る間、開設せられ
 たる、錢座の錢貨を載す。
 一奈良座は今日まで寛永十三年開設のものとなし居たれども、寛永十
 三年といふ事蹟明かならされは、年月未勘のものとなす。
 一足洗座のことは近時事實發見して誤りなることを知り得たを、刪
 除して、其の座のものとなし居りたる錢は、悉く年月所鑄座未勘錢中
 より編入せり。
 一寛永年間より開設せられたる、各座の末期所鑄錢の、錢圖に用ひたる搨
 摸ハ、おほむね母錢よりとりたるものなきとも、尙ほ斯ばかり形の、小
 なるものなり、されは其の子錢に至りては、極めて輕小粗薄のものな
 ること、知るべし。

凡例

一寛永泉志二卷には、寛永十四年より明暦年間に至る間、開設せられ
 たる、錢座の錢貨を載す。
 一奈良座は今日まで寛永十三年開設のものとなし居たれども、寛永十
 三年といふ事蹟明かならされは、年月未勘のものとなす。
 一足洗座のことは近時事實發見して誤りなることを知り得たを、刪
 除して、其の座のものとなし居りたる錢は、悉く年月所鑄座未勘錢中
 より編入せり。
 一寛永年間より開設せられたる、各座の末期所鑄錢の、錢圖に用ひたる搨
 摸ハ、おほむね母錢よりとりたるものなきとも、尙ほ斯ばかり形の、小
 なるものなり、されは其の子錢に至りては、極めて輕小粗薄のものな
 ること、知るべし。

一明曆淺草座は、明曆年間に再興せられたるものなることを事實發見せり、故に別座となりて掲げあり。
一沓谷座は今日まで、寛永年間のものど、皆な人信ト居あるものなれども、近ころ事實を知り得ぬれば、明曆年間のものど改めあり。

明治三十一年の春

編者識

寛永泉志 二卷

花林塔三上香哉
進而堂榎本文城
編述

公爐錢

幕府ハ寛永十三年五月に、武藏國江戸、及ひ近江國坂本の二ヶ國に錢座を設けて、鑄錢おさしめたるも、尙ほ未だ新錢の通用、全國に周ねからざりしかば、更に又各地に支錢座を増設して、大に錢貨の鑄造をなさし免たり。

鑄錢所

水戸 仙臺 吉田 松本 高田 長門 備前 豊後

中川内膳領内

一只今迄被仰付候分にては、諸方へ弘り兼候間、代物澤山鑄させ、其國は勿論、他國へも御定の如く、金一兩に四貫文、一分に一貫文宛、拂候様に可申付候。

一寛永之新錢、本を越候而、如此爲致可申事。

一錢鑄候者聞立、領内勝手よき所々に而可申付候事。

寛永十四年丑八月

此の法令を見るときは、昔しより松本、吉田の二錢座と寛永十三年となせし、決してさよはあらで、寛永十四年八月以後は、開設せられたるものあること明らかし、されど其他の各地に於ては、同時に鑄錢おせ

しや否や、今日未だ其の事蹟を詳かよすることを得
さまども、鑄錢おしたるところあらんもえ知れざる
ことよふん。

○寛永十四年至十七年松本座所鑄錢

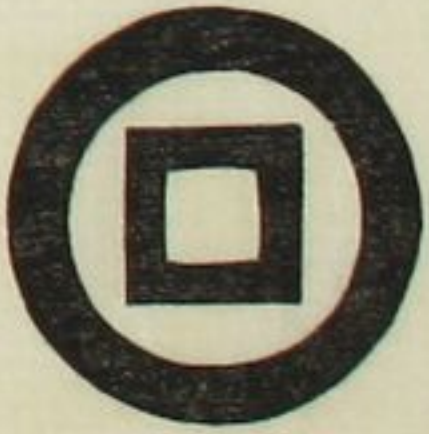
藤譜に「寛永十三年信濃國松本所鑄、其錢二様、銅質亦有黃白二種、大者徑八分九厘、重一匁一分」とあり、されど幕府の法令によりて、寛永十四年より同十七年八月に至るの間、信濃國松本に於て鑄るをよろのものとなす。

奉使小録に「定、於信州松本、新錢座望申よ付而、從其方書付乞取申附候、無相違急度用意候而可被鑄立候、此上は餘人望申共、一口之外申附間敷候、兵糧之儀は相場次第以相對可申附候、炭薪未進有之候は、催促人共へかゝ可申候以上。寛永十三年丙子極月二十七日、梅半左衛門、香西茂左衛門、乙部九良兵衛、外四人、今井勘左衛門殿」と
寛永錢錄に「寛永十四年八月、幕府下様錢子、各國、令所鑄無大小」とあり、次に圖する所の
大様あるものは、其様錢といふよ方るものゝ。

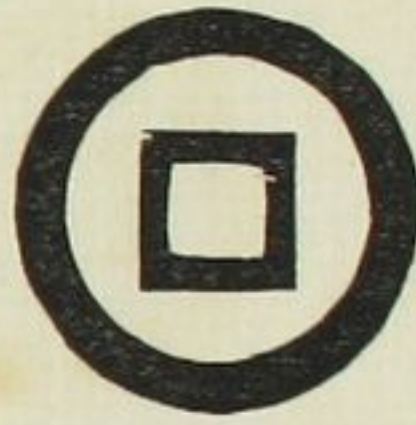
寛永松本錢



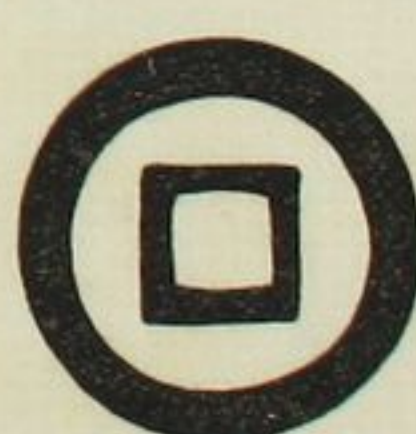
八 同 上
背 同 上
廣 郭 上



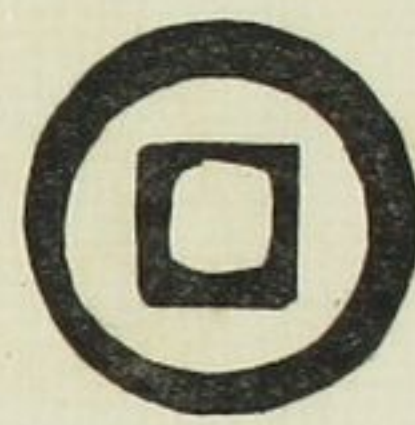
七 同 上
細 上
縁 上



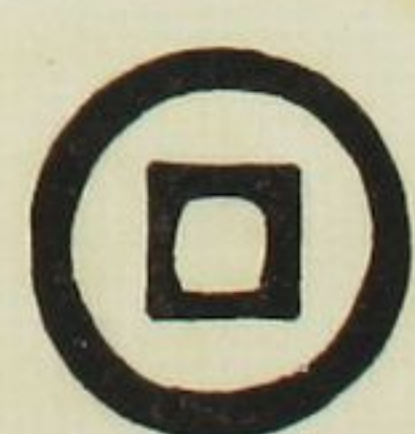
六 同 上
高 上
寛 上



六 同 上
斜 上
寶 上



六 同 上
小 同 上
字 上

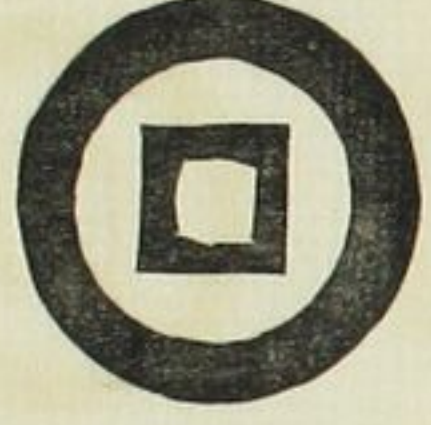


○寛永十四年至十七年吉田座所鑄錢

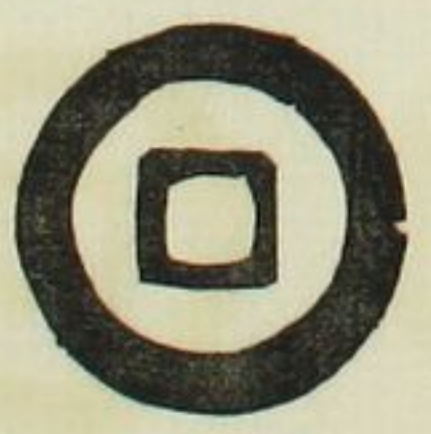
藤譜に「寛永十三年三河國吉田新錢座町所鑄、此錢字文結体及徑重不見之」とあり、されど新錢座増設の布令によりて、寛永十四年より同十七年

八月に至るの間、參河國吉田新錢座町に於て鑄るところのものなりとす。

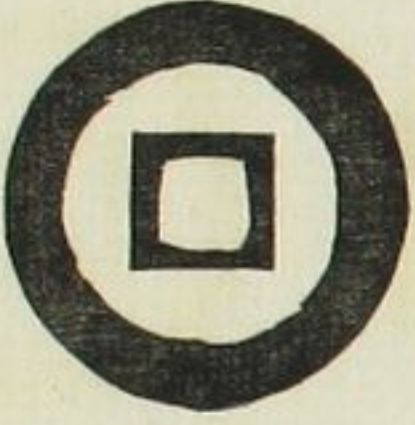
寛永吉田錢



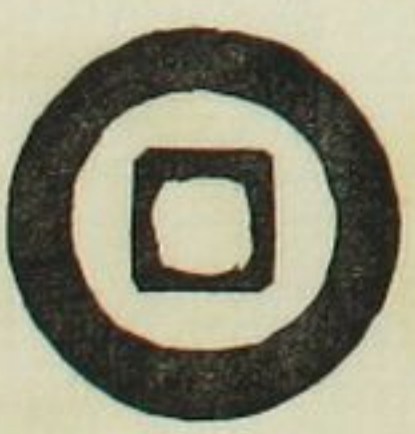
八 同 上
背 同 上
小 郭 上



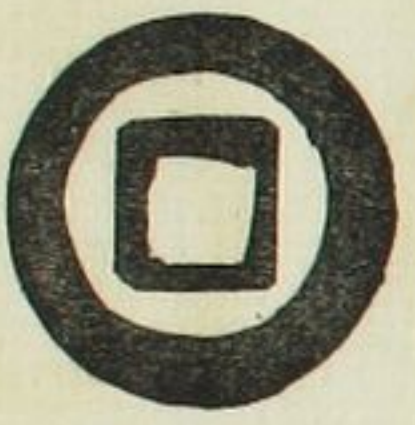
五 同 上
巨 同 上
頭 通 上



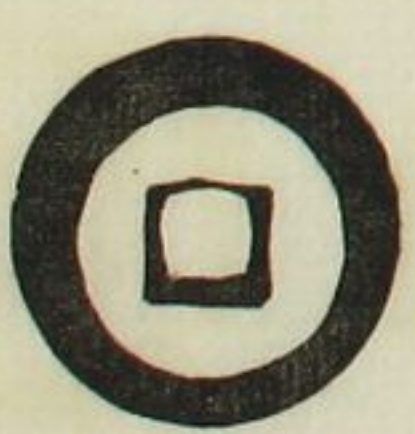
七 同 上
缺 同 上
劃 通 上



九 同 上
廣 上
永 上



八 同 上
背 同 上
小 郭 上



○年月未勘奈良座所鑄錢

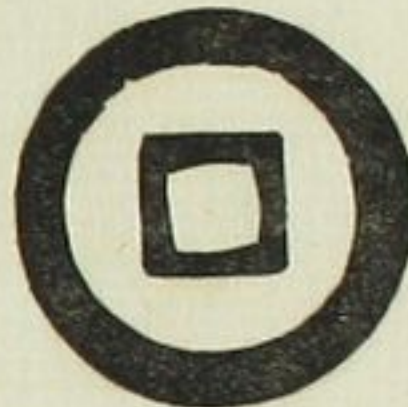
藤譜に「寛永十三年南都所鑄、白銅精煉、摸狀三種、徑八分強、重一匁、間有黃銅者」とあれども、新錢座設置の布令、及び新錢座増設の布令にも奈良座のあと見えざれば、寛永十三年のものにも、はた十四年のものにもあらざるべし、されど未だ其れ年月を詳かにするを得ず。

稻垣尙友、芳川維堅等が後の追加稿本又は「俗曰敦直書」とあり。藤木甲斐守敦直は加茂の祠官にして、書傳を妙佐、成定の二子より受け、入木道正統三十五世として其名海内へ傳播す、慶安二年正月四日卒す、歳六十八。

奈良座錢

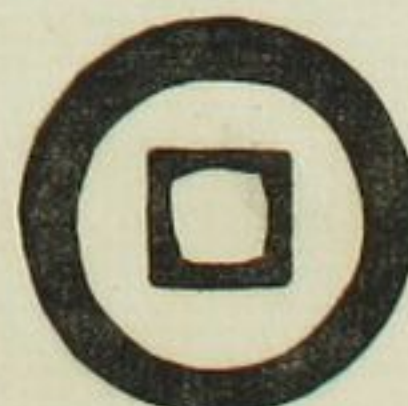
異永

八



動上

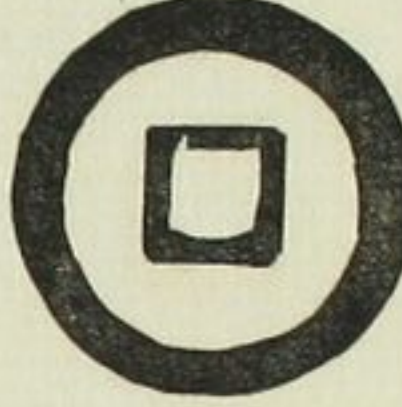
肥字上



同上

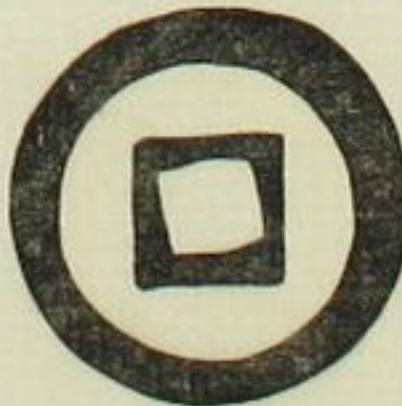
背小郭

七



同上

潤字上



同上

小足寶

六



同上

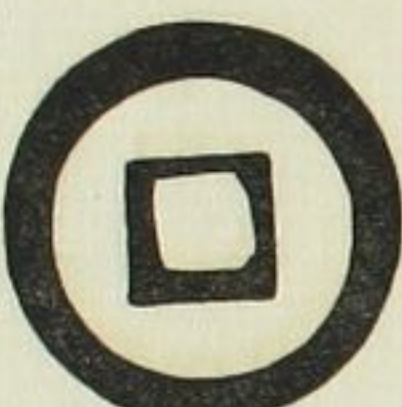
狹字上



同上

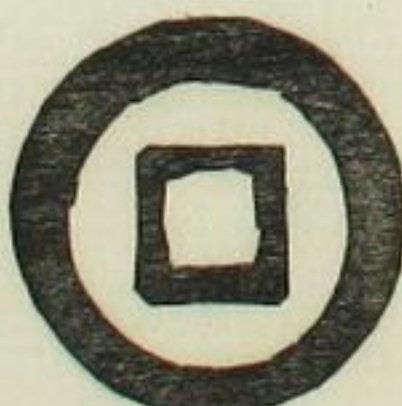
短尾寬

六



同上

接點永



○年月所鑄座未勘錢

藤譜に「右八十餘品、寛永十三年以後所鑄、而今不可知、皆淺草所鑄之支流也、銅質精煉、如淺草所鑄、間有褐銅者、徑八分強、弱重一匁」とある所のものとして、未だ何處のものとも判明せざるもの、みなり。

次は圖するところの總てのものを、人呼んで淺草支流錢といふ、其の支流錢なる言葉は藤譜に「皆淺草所鑄之支流也」といふ語を略したるものにて、或は淺草座未流の錢と解釋するものもあれど、それは誤りにして、たゞ支錢座錢の判明せざるものを指

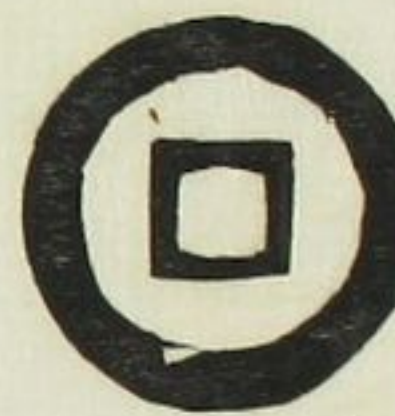
したるなり、見よ藤譜「銅質精煉、如淺草所鑄」とあれば、決して淺草座にて鑄しものといふ意はあらざるなり、その「淺草所鑄之支流也」といふは、淺草座即ち江戸座の支錢座の錢といふの意にして、増設錢座の不明ある、あらゆる錢を總稱せしものありと知るべし。

寛政四年壬子春三月改正せしといふ、藤原貞幹の寛永錢譜稿本は「淺草所鑄之支流也」の文字見えず、寛政七年乙卯秋日改正せしといふ稿本より、初めて書き加られたるものなり。

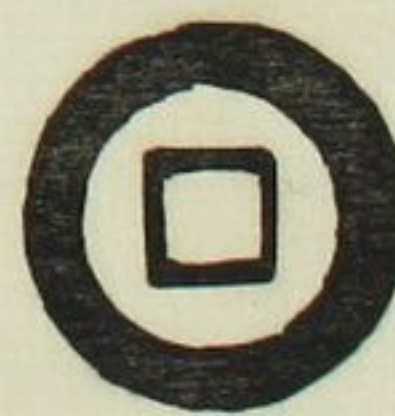
此の支流錢中よは、江戸座にて鑄し所のものも、或は混しあるやえ知るべからざれども、今日よしては知ることいと難し。

未勘錢

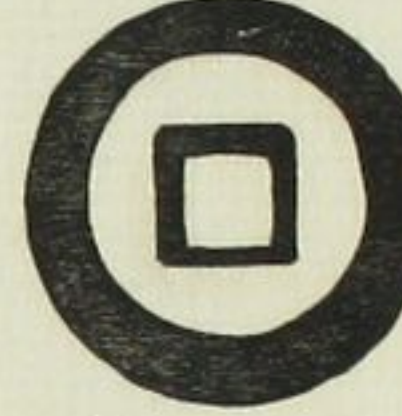
七 肥永手



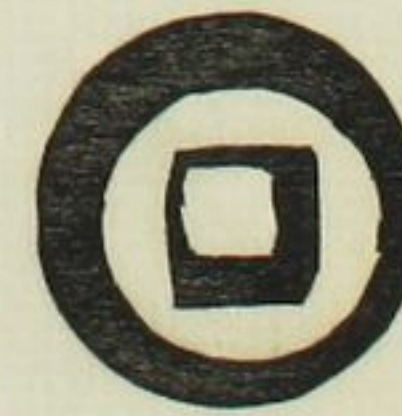
七 同 上
背 同 上
潤 緣 上



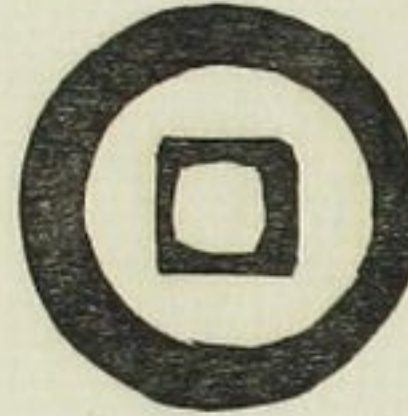
九 同 上
仰 同 上
頭 通 上



十 同 上
同 同 上
細 緣 上



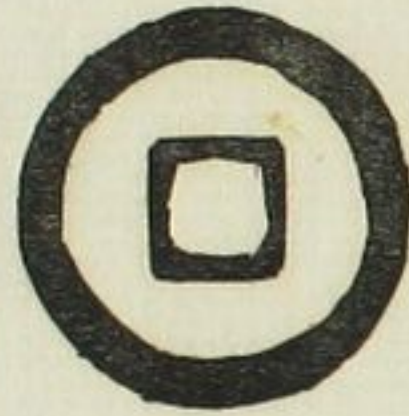
十 同 上
笹 同 上
手 永 上



五 同 上
同 同 上
背 廣 郭 上



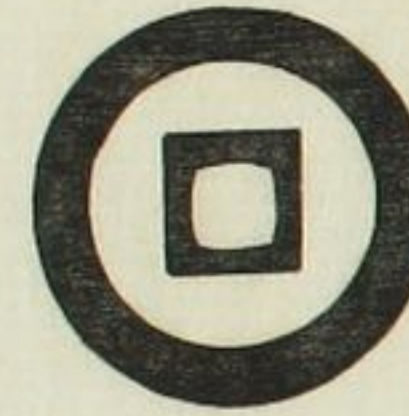
七 同 上
細 同 上
字 上



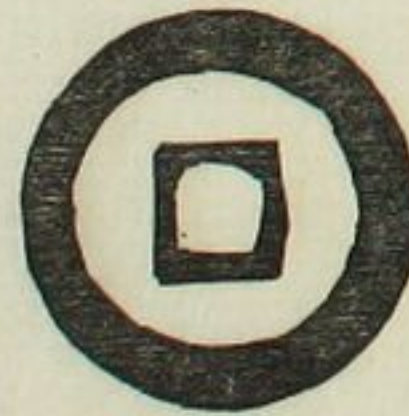
七 同 上
同 同 上
短 尾 永 上



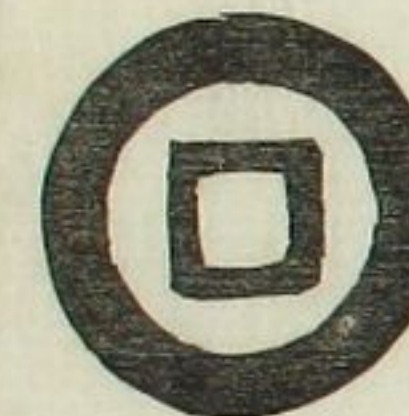
八 同 上
彎 柱 永 上



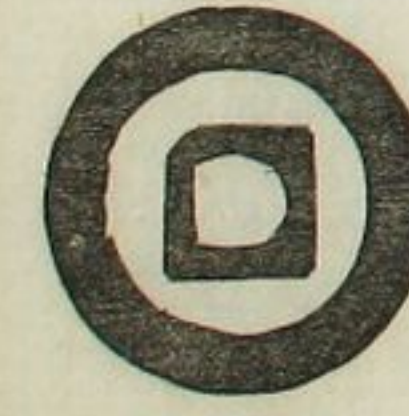
八 同 上
潤 同 上
緣 上



十 同 上
挑 上
永



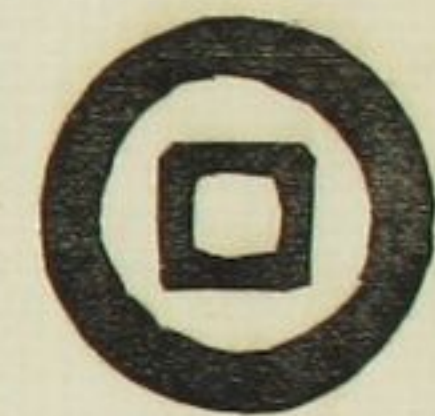
十 動 上
細 同 上
緣 上



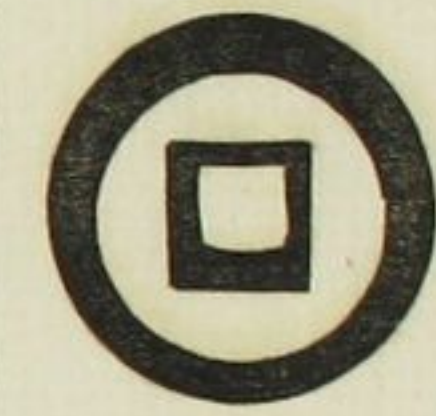
八 同 上 二草點手	八 同 上 接郭	十 同 上 同同 划輪	十 同 上 小同 字上
七 同 上 潤同 緣上	五 同 上 划同 輪上	十 同 上 同同 再划	六 同 上 背同 潤緣

八 同 上 細同 字上	六 同 上 潤字 手	十 同 上 潤 字	九 未勘錢 同 背細 緣上
七 同 上 同同 潤緣	六 同 上 背同 廣郭	八 同 上 划同 輪上	八 同 上 同同 潤緣

九 未勘錢
四草點



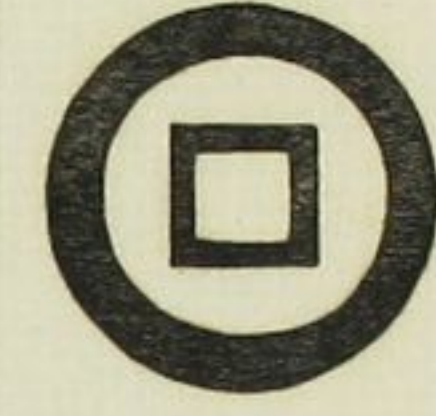
九 同上
不草點



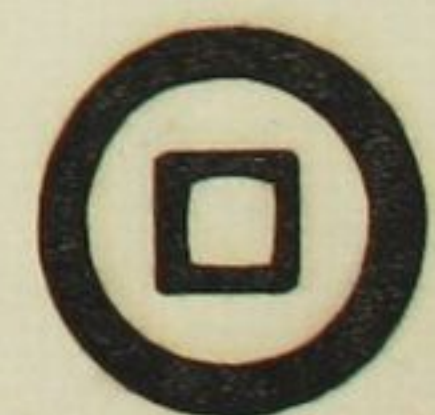
九 同上
不草點手



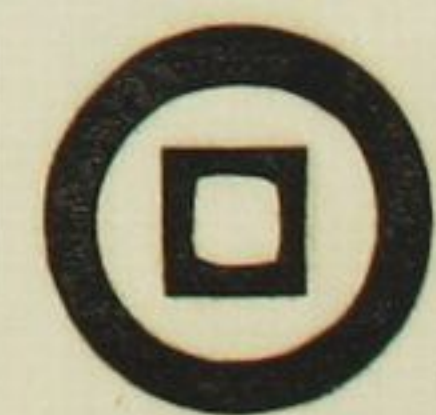
九 同上
長永



九 同上
小字上



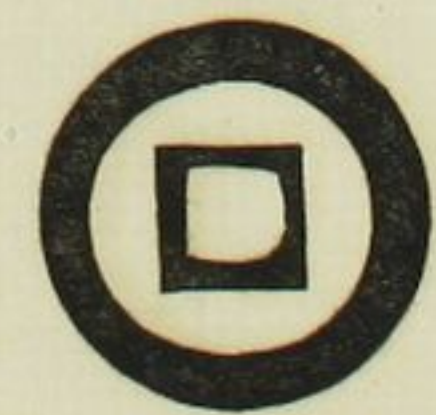
八 同上
細字上



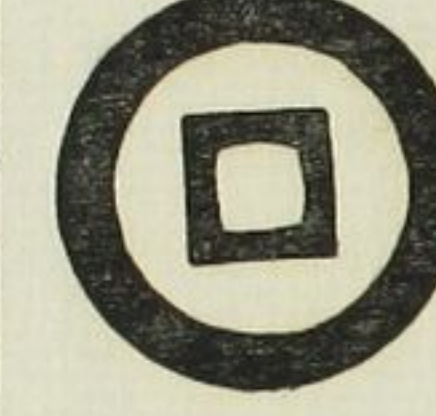
八 同上
瑕寶上



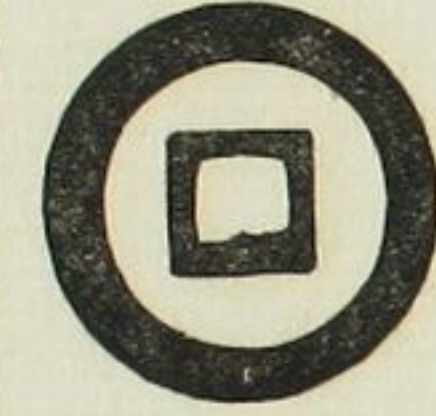
七 同上
外跳寬上



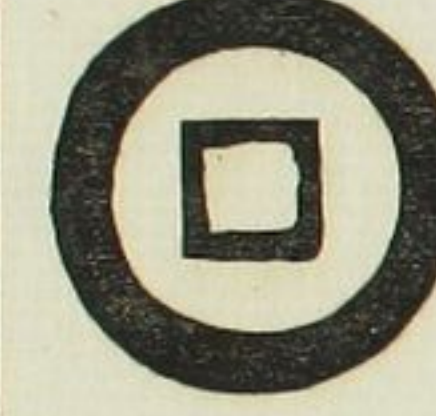
八 未勘錢
長永手



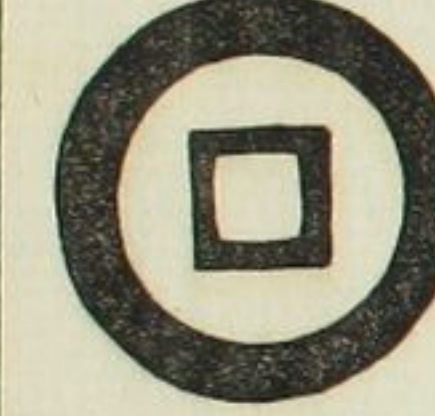
七 同上
織字上



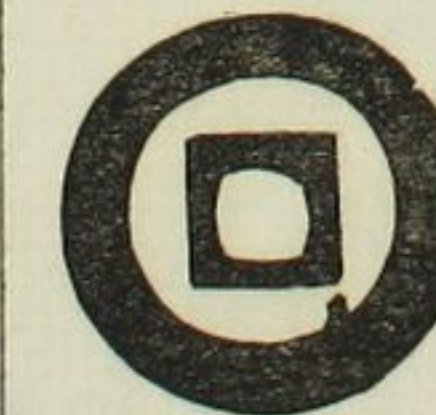
九 同上
大文字上



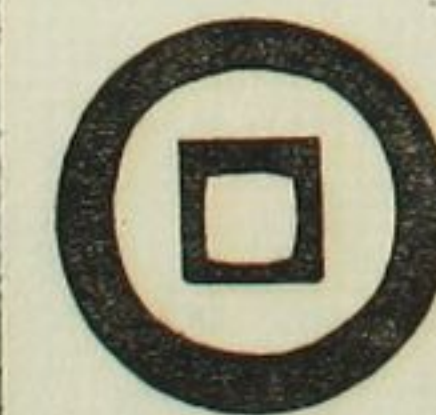
七 同上
流永



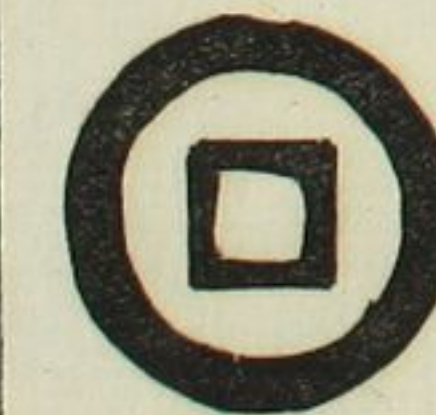
七 同上
背潤緣上



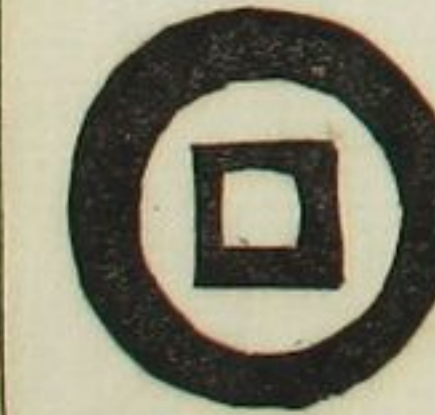
七 同上
同草點永上



八 同上
陰劃上



五 同上
廣郭上



十 未勘錢

縮 寬



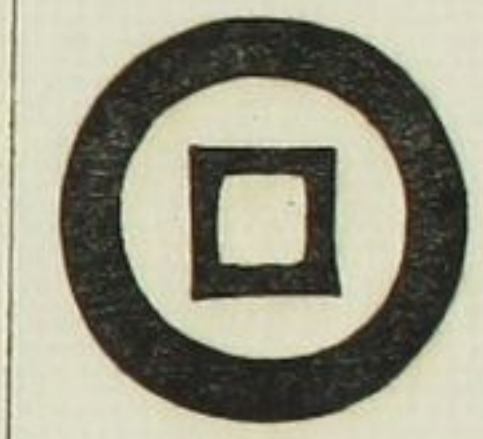
六 同 潤 同上

縁 上



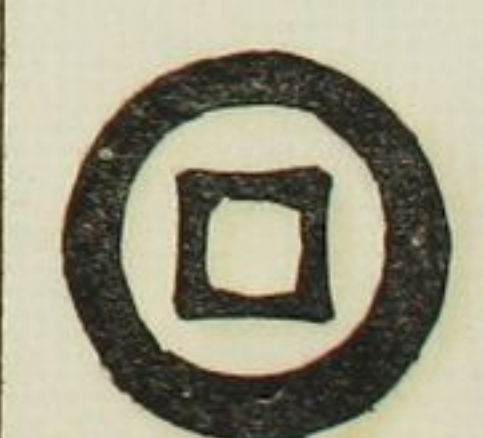
八 同 長 同上

通 上



八 同 大 同上

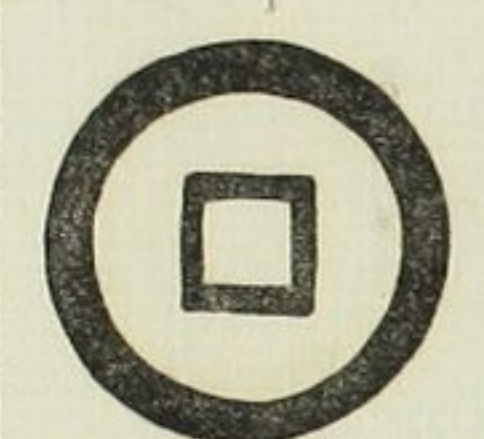
字 上



上に圖する縮寬以下の四品は、今日まで足洗座錢とあしたるものあり。駿河國足洗村錢座の事は、貞幹も唯だ傳説おどにて、識り得たるものよてもあるよや、寛永十三年駿河國足洗村所鑄、此錢字文結体及徑重不見之」と記したるのみよて錢の撰定をかかりしを、後よ至りて上圖の錢を撰て足洗錢とあしたるものあり、去かある後芳川維堅、藤譜よ元祿四年龜井戶錢となしたるもの、内より、一の錢を撰び出して沓谷座錢とあしたるものよ以來、駿河國には同時よ二の錢座ありたるもの、如くあれり、されど足洗村と沓谷村とは、横内川を以て隔てらるゝのみよて、錢座のありしは全く沓谷村ありしこと近來明確せり、そののみあらず彼の駿河府志よ、錢座の趾は沓谷村ありと記されれば、足洗錢座の事ハ謬られたるものありとす。

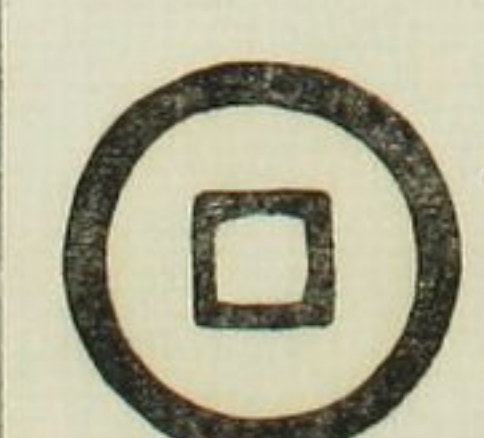
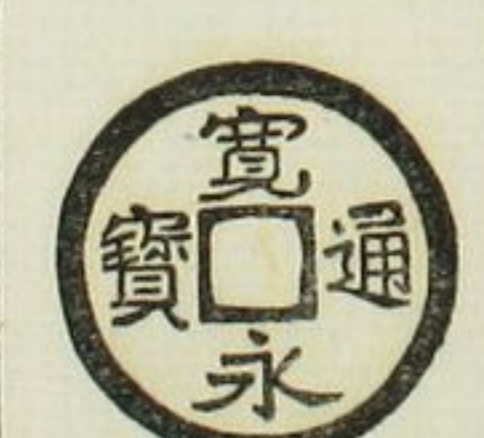
八 未勘錢

跛 寶



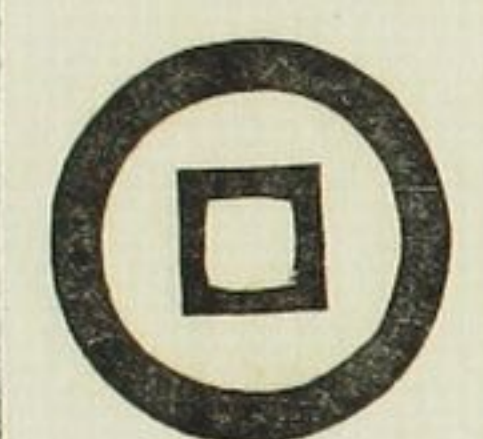
八 同 接 同上

郭 上



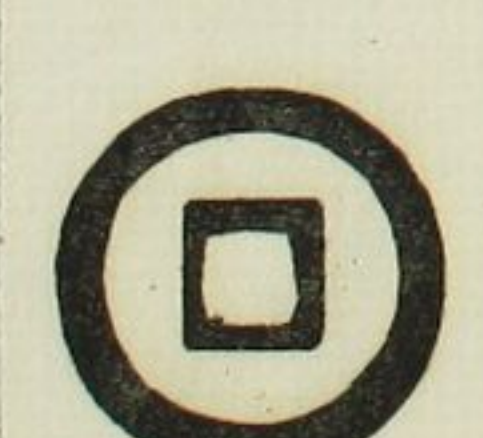
八 同 肥 同上

尾 永 上



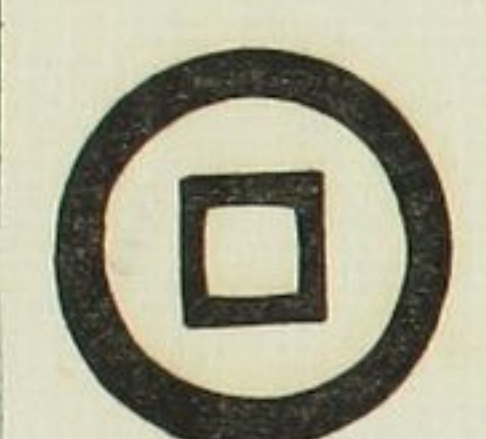
八 同 肥 同上

尾 寬 上



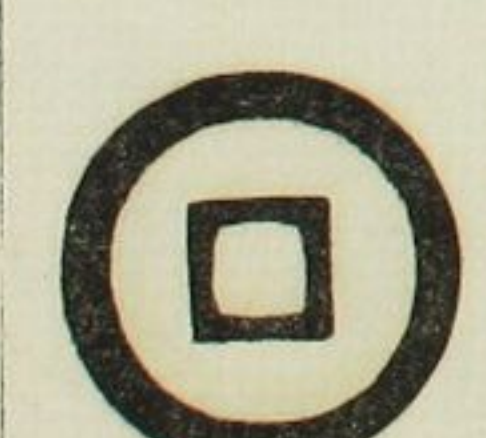
九 同 肥 同上

字 上

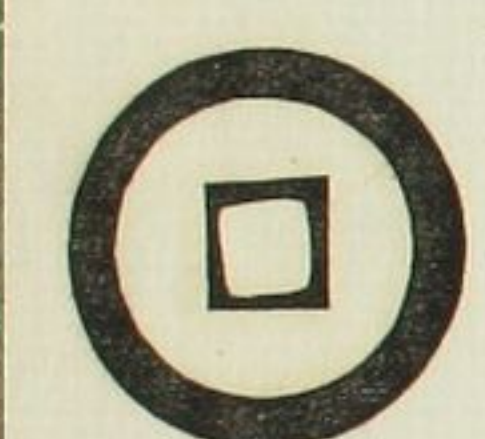


九 同 瘦 同上

字 上

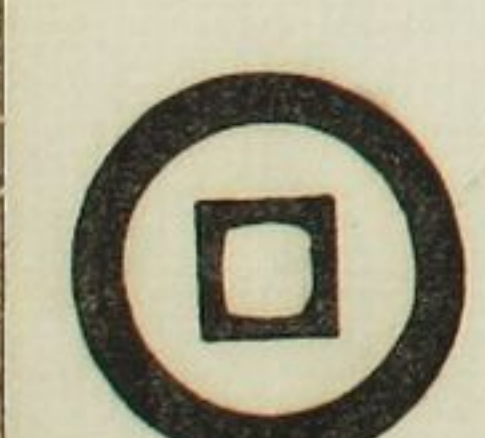


七 同 無星文手



七 同 狹 同上

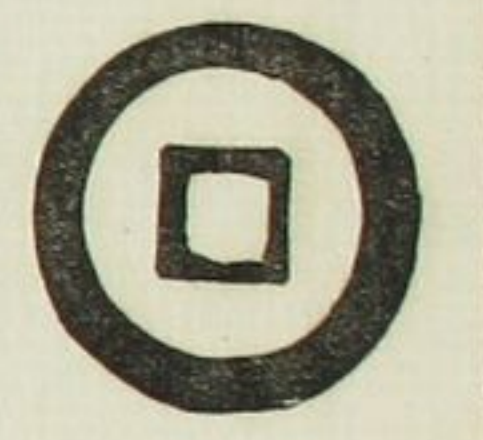
永 上



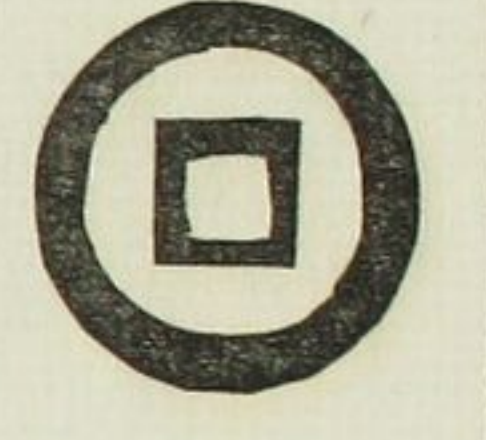
八 同 細 同 上 字 上	八 同 勁 上 永	九 同 小 同 上 字 上	八 同 力 上 永
七 同 荆 同 上 尾 永 上	八 同 小 同 上 字 上	四 同 縮 同 上 通 上	八 同 細 同 上 緣 上

八 同 狹 上 足 寬	六 同 背 同 上 小 郭 上	七 同 窄 同 上 目 寬 上	七 同 未 勘 錢 宏 足 寬
八 同 背 同 上 小 郭 上	六 同 背 同 上 大 郭 上	七 同 小 同 上 永 上	七 同 縮 同 上 通 上

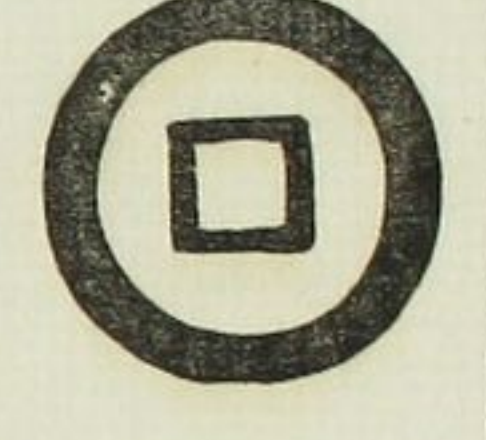
八 未勘錢
勁永手



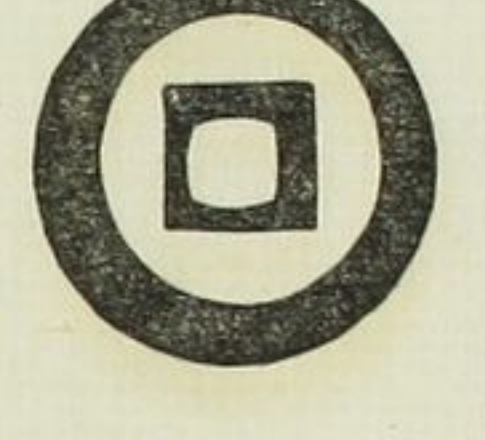
八 同上
放永



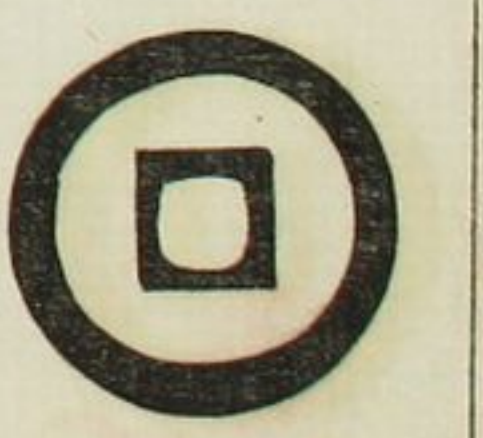
七 同上
正字手



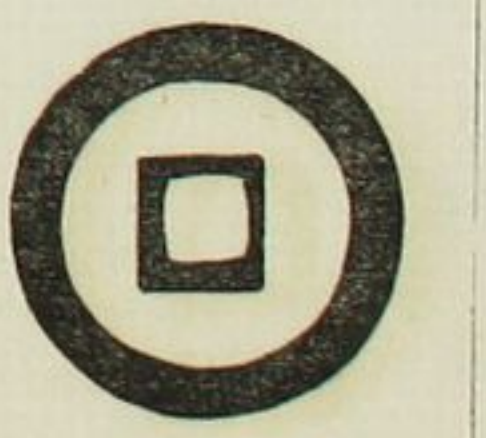
七 同上
廣永



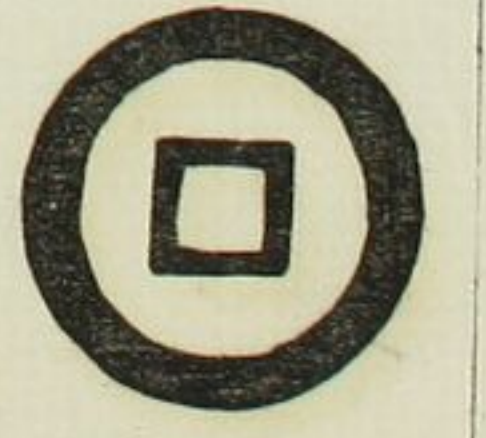
八 同上
接同上
郭上



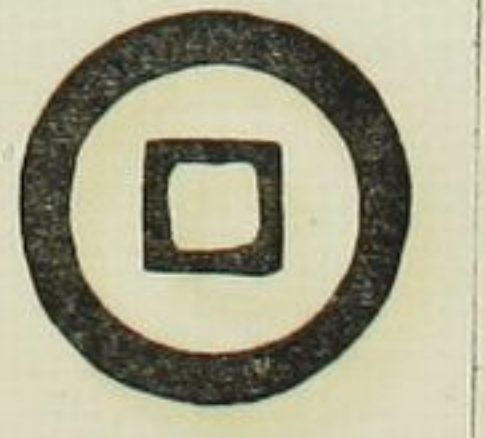
八 同上
背長郭上



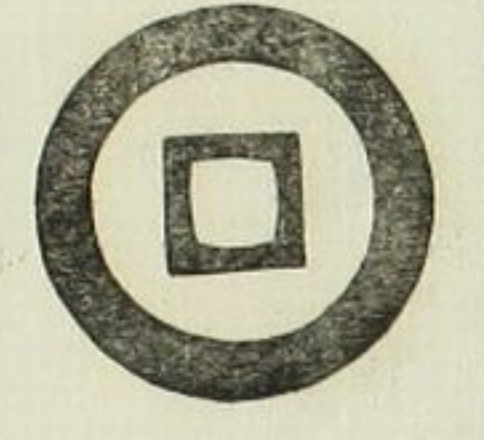
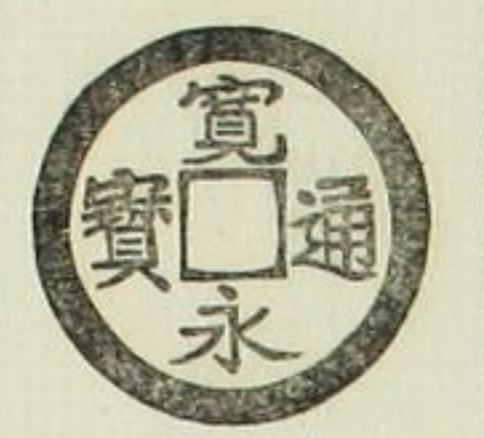
七 同上
狹同上
永上



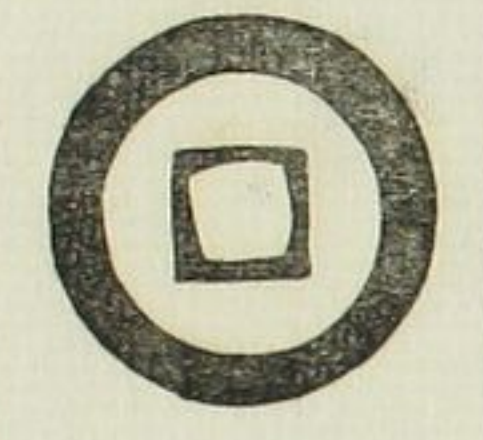
七 同上
陰起永上



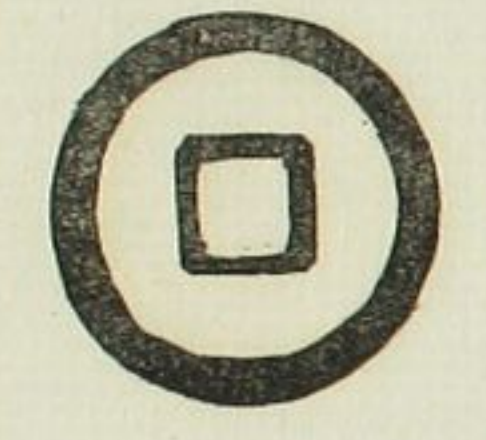
七 同上
小同上
字上



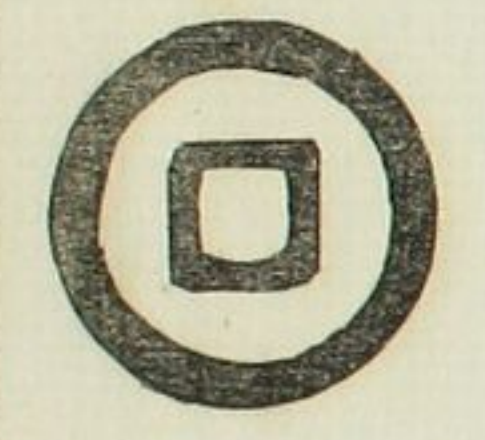
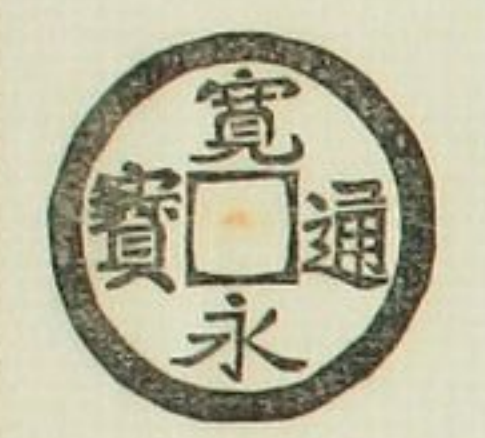
六 同上
三大點上



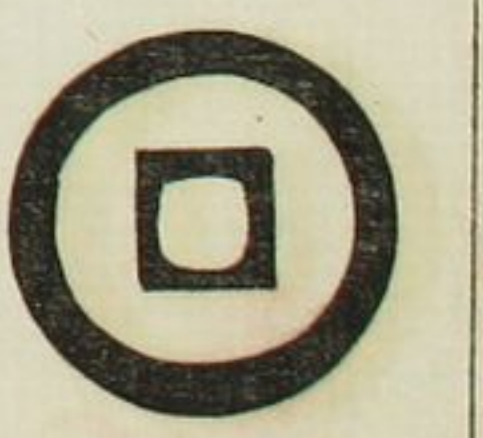
七 同上
寬字



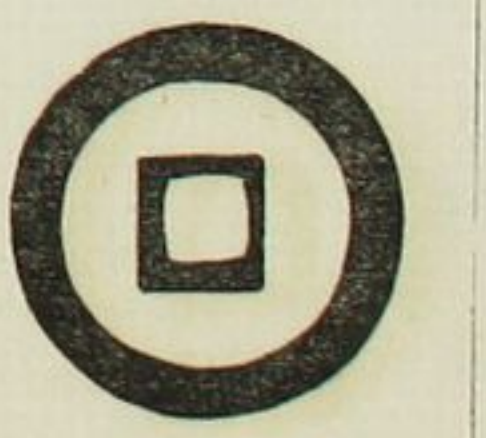
七 同上
寬同上
離點上



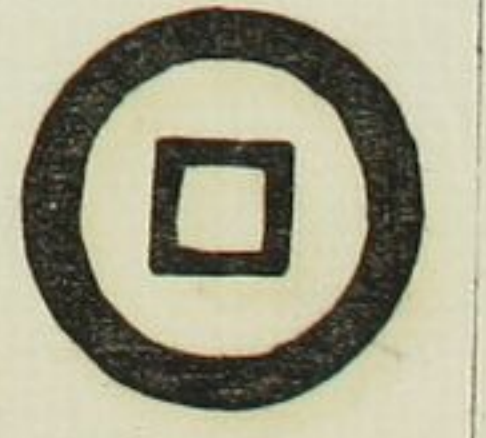
八 同上
接同上
郭上



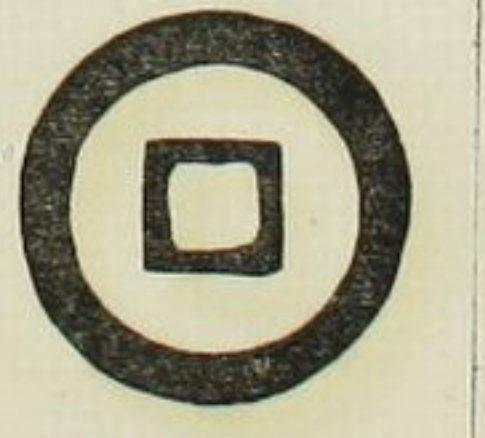
八 同上
背長郭上



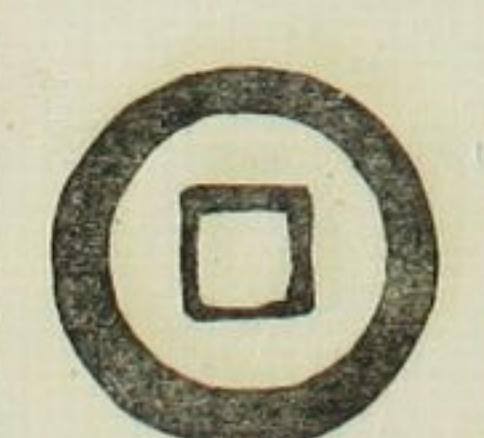
七 同上
狹同上
永上



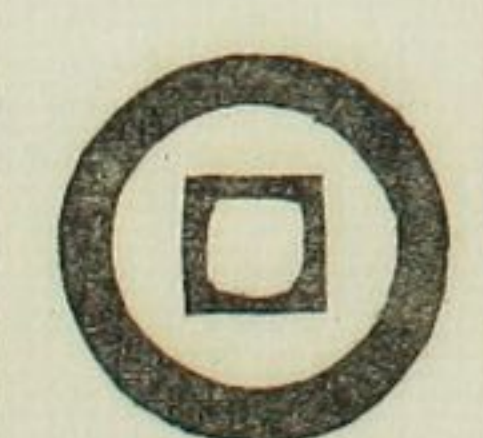
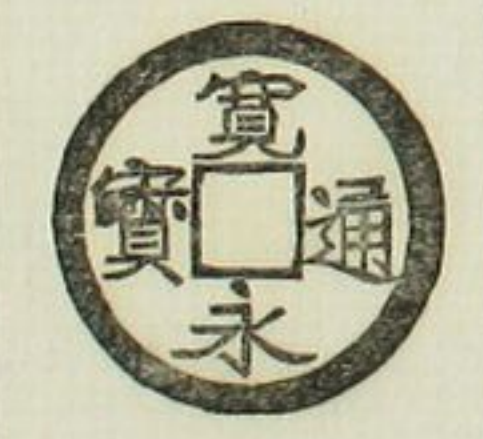
七 同上
陰起永上



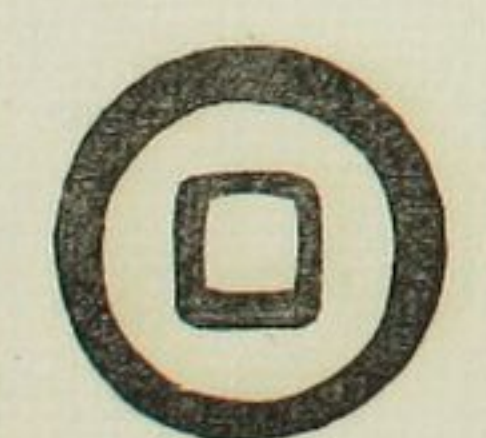
七 同上
細同上
字上



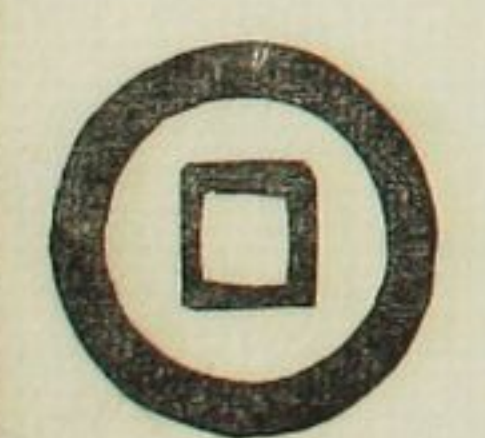
六 同上
同同上
倒點上



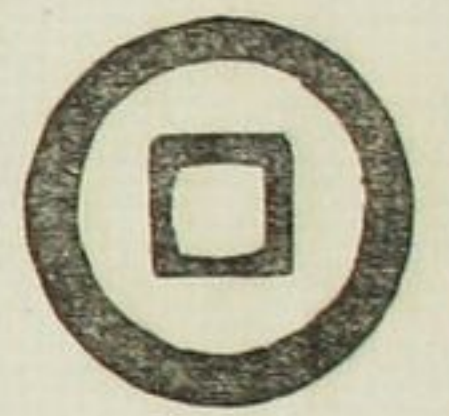
七 同上
小同上
永上



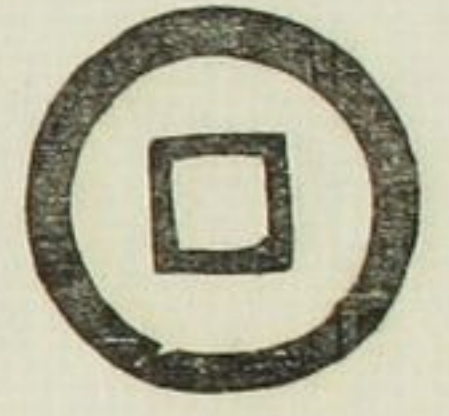
七 同上
同同上
潤緣上



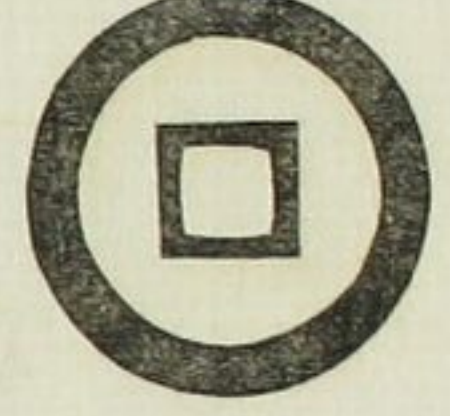
六 未勘錢
大同
點上



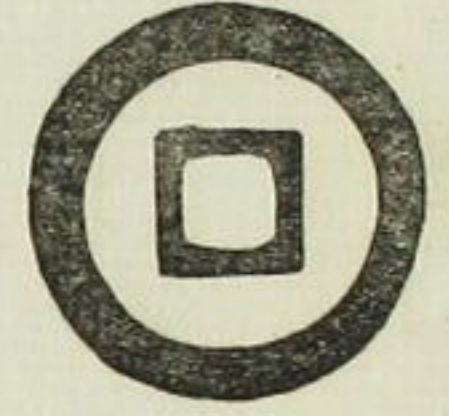
七 正
同上
永



七 正
同上
永手



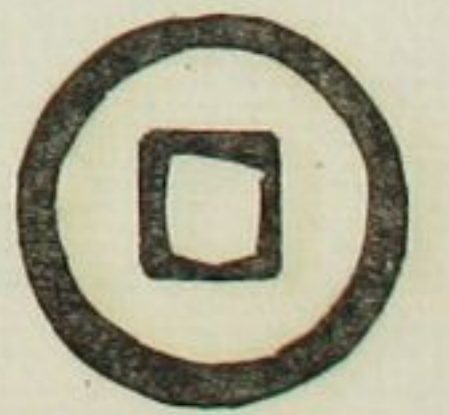
八 細
同上
字上



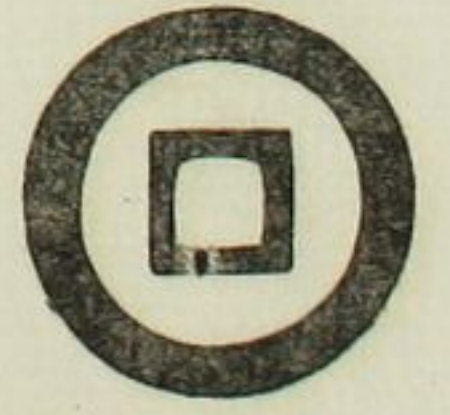
七 同
同上
同仰頭通



七 長
同上
尾永上



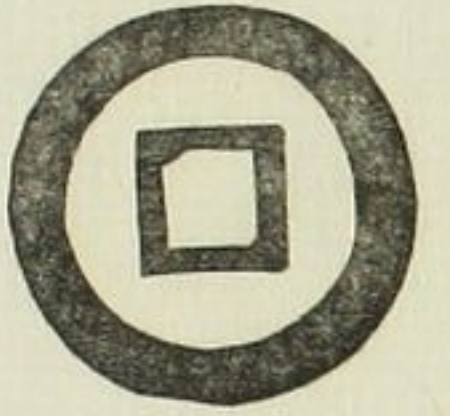
八 小
同上
字上



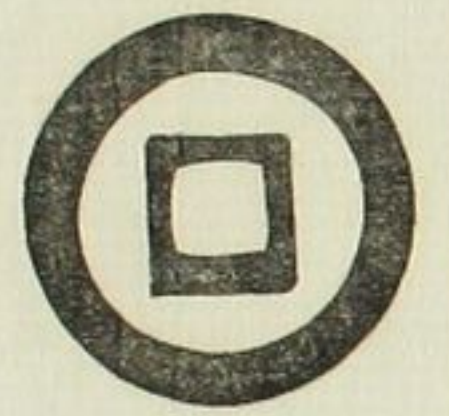
七 背
同上
長郭上



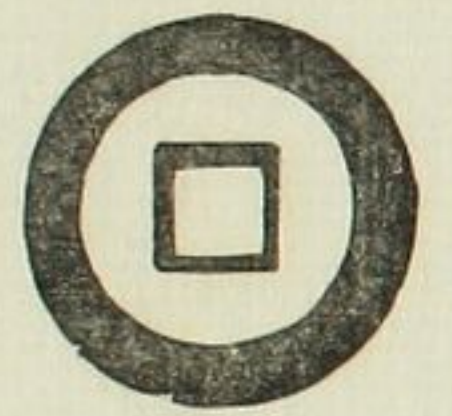
八 太
同上
細



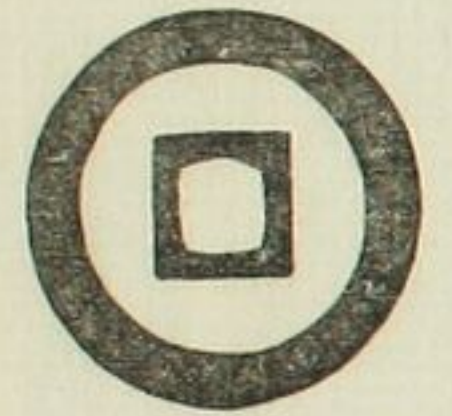
八 圓
同上
點永上



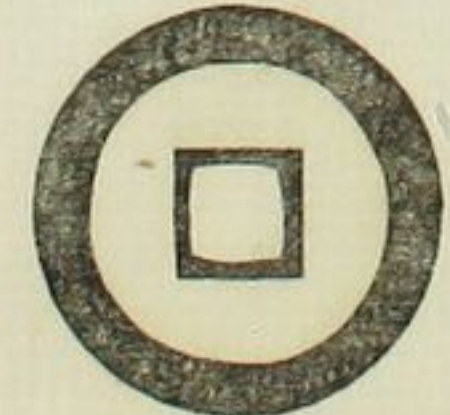
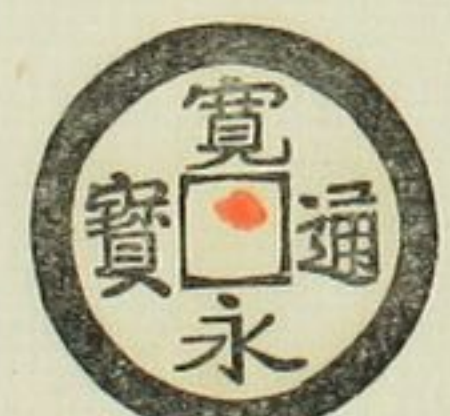
七 背
同上
潤緣上



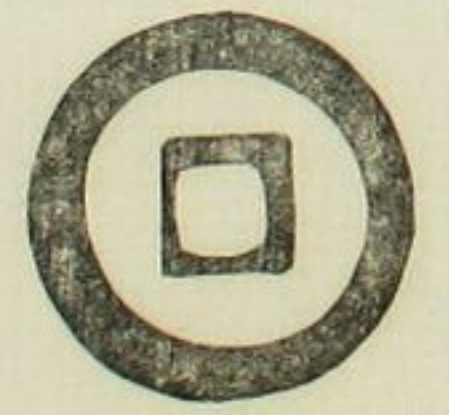
九 肥
同上
字上



八 小
同上
字上



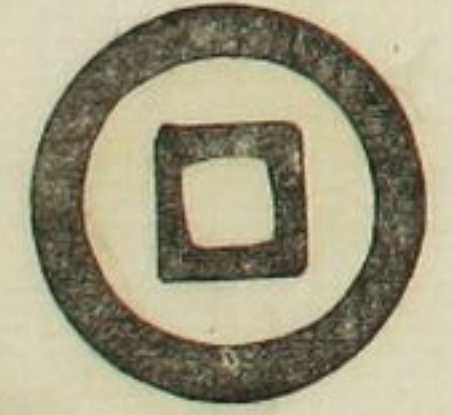
七 草
同上
點永上



六 背
同上
廣郭上



九 小
同上
字上



六 同 上 長嘯子手	五 同 上 長嘯子	六 同 上 俯頭永手	七 同 上 小目寬上
六 同 上 背長郭上	五 同 上 背長郭上	六 同 上 短尾永上	九 同 上 小字上

八 同 上 俯頭永	八 同 上 歪永	八 同 上 么永	八 同 上 未勘錢 仰永上
八 同 上 跪寬上	八 同 上 小字上	八 同 上 小字上	八 同 上 同小字上

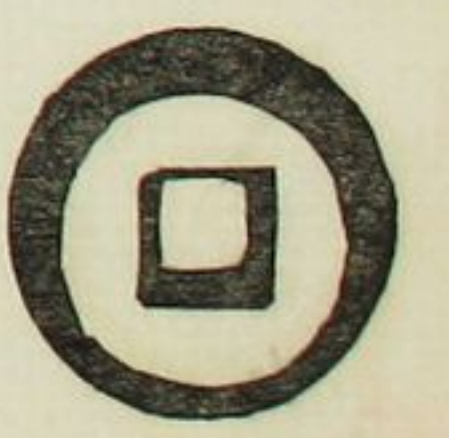
未勘錢
同 上
低頭通



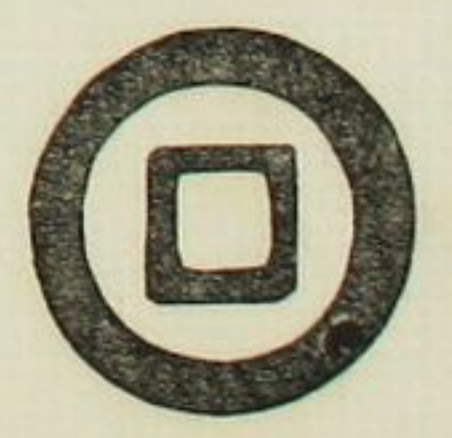
同 上
肥字上



同 上
同 上
同短尾永

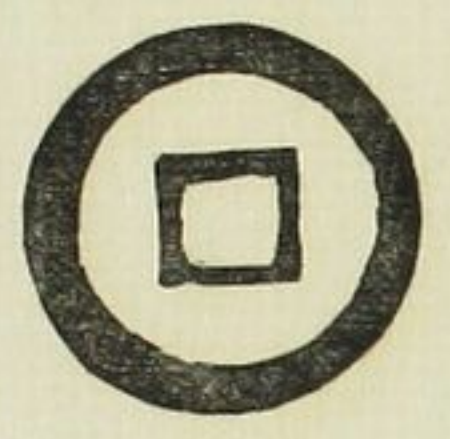


同 上
背大郭上

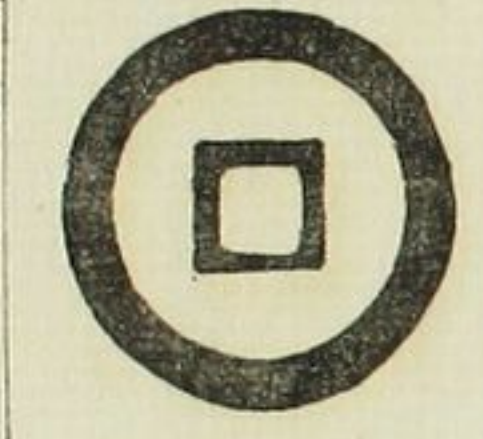


上に圖する所の長嘯子二品は、長嘯子の書する所なるといふ。
 木下勝俊は長嘯子と号す、從四位に叙し、少將若狹守に任せられ、若州小濱の城主
 なり、晩年東山に隱居して又天哉翁と号す、慶安元年六月十五日卒す。
 次に圖する所のものは良如の書するところありといふ。
 良如上人名は圓光、西本願寺第六世の法主あり、慶長十七年十二月七日を以て生
 れ、寛永三年四月十九日得度して大僧都とあり、同十五年十一月大僧正に任し、寛
 文二年九月七日寂す。
 何に據りしかを知らざれども、一説又此錢、山城國伏見に於て鑄るところのもの
 ありといふ。

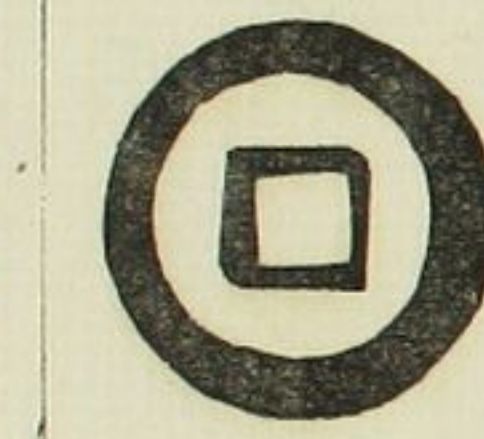
未勘錢
同 上
良如



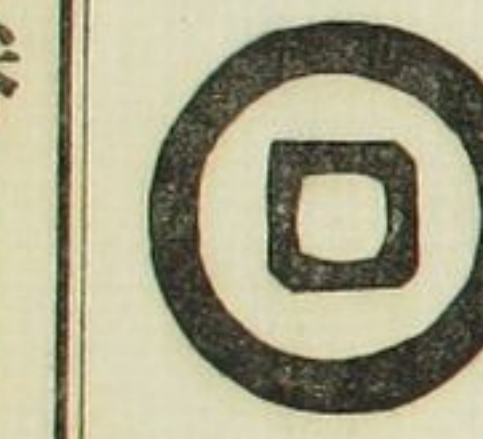
同 上
小同字上



同 上
良如手



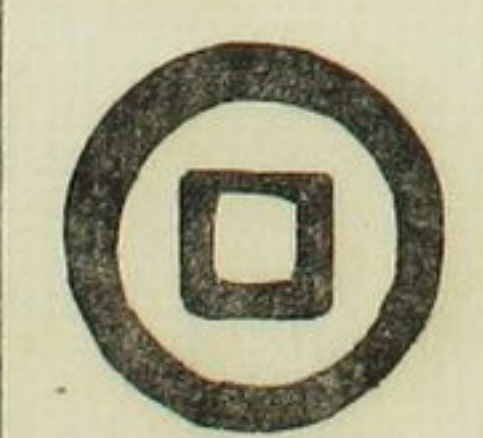
同 上
婉文



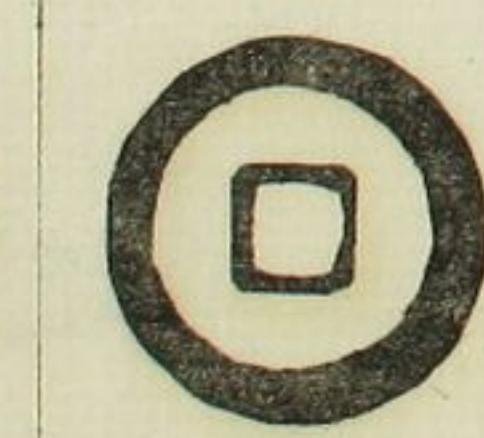
同 上
細字上



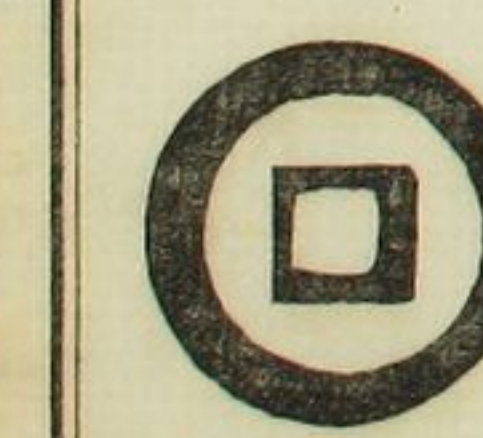
同 上
背大郭上



同 上
長永上



同 上
小同字上



八 同 大 上 永	九 同 小 上 永	十 同 小 上 字	十 同 廣 上 永
八 同 勇 上 文	八 同 長 上 寶	八 同 縮 上 字	九 同 短 上 尾 寬

三 同 異 上 寬 小 永	五 同 進 上 點 永	六 同 短 上 足 寶	八 同 未 勘 錢 背 潤 緣 上
二 同 狹 同 上 寶	五 同 背 同 上 長 郭	六 同 小 同 上 字	六 同 背 同 上 小 郭

七 同 背同上 細緣上	八 同 奇同上 永上	六 同 塞同上 頭通上	七 同 麗上 書
七 同 潤同上 緣上	八 同 接同上 郭上	六 同 同同上 鑿頭通上	七 同 潤同上 緣上









六 同 勁上 文	八 同 白銅錢	七 同 小頭通	八 未勘錢 降寶
六 同 背同上 廣郭上	七 同 異同上 頭通上	三 同 寶連輪	八 同 大目寬

上に圖する白銅錢以下の數種は、藤譜ニ右二十餘種白銅者、説見上ト記し上に掲げし八十余品中の、錢質白銅なるものを重複ニ録したるものなれども、茲ニは主ニ白銅のものを、みを撰びたり、されど間、黄色に富たるものもあるとあるべし。

斯くのごとく幕府は、寛永十四年ニ錢座を増設して鑄錢なさしめたるも、年を経るニつれて、錢質漸次ニ粗惡となり行しかば、遂ニ寛永十七年八月、各地の鑄錢座ニ停止の令を下せり。

○寛永末期各座所鑄錢

寛永年間に開設せられたる各國の錢座に於て、年月の過行まニにいつしか私しの心もて、輕小粗薄の錢貨を鑄出すに至りしかば、寛永十七年八月遂に各地の鑄錢を停止するの令を下されたり、されば今ニに幕府が鑄錢停止の令を下せしめし原因と見るべき錢を抽出して其の二三を圖す。

<p>七 吉田座錢 廣 永</p> 	<p>六 坂本座錢 草 永</p> 	<p>八 芝座錢 廣 寬</p> 	<p>五 淺草座錢 背 文 星</p> 
<p>六 奈良座錢 肥 字</p> 	<p>六 松本座錢 細 緣</p> 	<p>八 同上 狹 寬</p> 	<p>八 同上 二 草 點</p> 

されど尙ほ潜鑄する所多かりけん、寛永二十年二月二日左の令と發するに至れり。

一諸國在々所々におゐて、新錢鑄候事、堅御停止也、若相隱鑄出輩あらは可申出、假令同類たりと云とも、其科を免し御ほうび可被下候自然脇より訴人於有之は、本人は不及申五人組同罪よおこなふべし、並其所之者まで可爲曲事もの也。

寛永二十年未二月二日

さりければ世の錢貨は、又忽ちにして缺乏と來してけり、よりて幕府は明暦元年に至り、再び錢座の鑄錢を許したり。

一寛永の新錢金子一兩に四貫文、勿論一分に一貫文の賣買たるべし、若し違背致し高下の賣買仕におゐては双方より其賣買の一倍、爲過料

可出之、並に其町の年寄二百疋、其外家一軒より十疋つゝ、爲過意可出之事。

一大かけ、われ錢、かたなし、なまり錢、新悪錢、此外不可撰之、若選候者、五錢を押しつつかふ者有之は、或は其所に三日晒し、或は十日籠舍たるべし、其町の過料同前の事。

一新錢の義何の所にて、御免なくして一切不可鑄出之、若違犯之輩有之は可爲曲事之事。

一新錢被仰付し上は、仮令有來雖爲悪錢、或禮錢、或散錢等にも不可取扱之事。

一御料私領共に年貢収納等にも此定の通り不可相背事。
右條々堅可相守之者也仍執達如件

明暦元年酉八月二日







奉行

此の法令よりて見るときは、明暦元年八月に鑄錢せしめたるものにて、此の時新錢の鑄造を仰付らるるは、江戸淺草の錢座あり。

○明暦元年至萬治年間淺草座所鑄錢

明暦淺草の錢座は、明暦元年八月幕府の命によりて再興せられたるも翌二年十月に至り町人の願により民鑄に改められたり、彼の徳川十五代史に「明暦二年十月十三日淺草に鑄錢座を置く町人□□の願に依りて也」とあり又江戸志にも明暦記を引て「明暦二年淺草に新錢座を命せらる」とあり、まかりて此の錢座は萬治元年までは繼續せし証左あり、徳川十五代史に「萬治元年五月十三日、五百石以上の輩に新鑄の錢買ふべき旨を命す」と、故に明暦淺草錢は明暦元年八月より萬治年間に至るの間、江戸淺草橋場に於て鑄る所のものとなす。

橋場明神より東北の方ある田間に錢座の蹟あり、廣さ一町半ばかりの地にして今も銅氣残り居りて耕作するを得ずといふ、此の處は寛永にも明暦にも置かれし錢座の趾になん。
こゝに明暦淺草錢となしたるもの、藤譜に「右寛永錢元祿四年一説元祿十年至寛永元年龜井戸所鑄、銅質黄色、徑八分重一匁凡二種」とあるところのものと別二種を撰びたるものなり。

<p>明暦淺草錢 九 低 寬</p> 	<p>九 同 上 高 寬</p> 	<p>九 同 上 大 字</p> 
<p>九 同 上 小 頭 通 上</p> 	<p>六 同 上 濶 同 上 緣 上</p> 	<p>九 同 上 小 字</p> 

明暦二年よりは別々駿河國沓谷村に於て鑄錢のこと
許されたり。

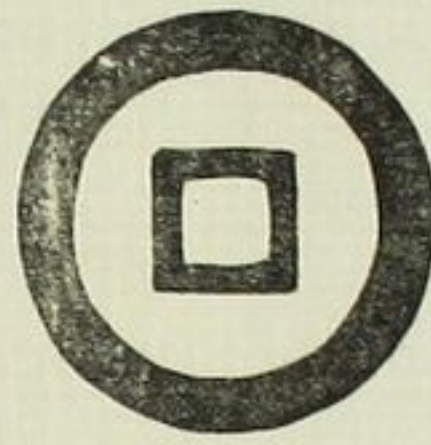
○明暦二年沓谷座所鑄錢

芳川維堅稿本に「寛永十四年至十七年、駿河國沓谷村所鑄」と、さきと駿河
府志には「錢局趾在沓谷村、明暦二年、鑄寛永通寶二百萬緡於此、一歲而止、
錢似大佛錢而稍輕」とあり、まかのみならず新錢座設置の布令、及び錢座
増設の布令とも、沓谷座のこと見えされは「寛永十四年至十七年」といふ
は誤りなるべし、故に今駿河府志に據て、明暦二年駿河國沓谷村に於て
鑄る所のものなりとす。

明暦沓谷錢

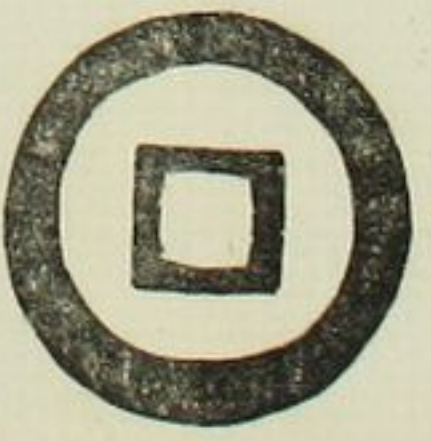
直跳寬

十



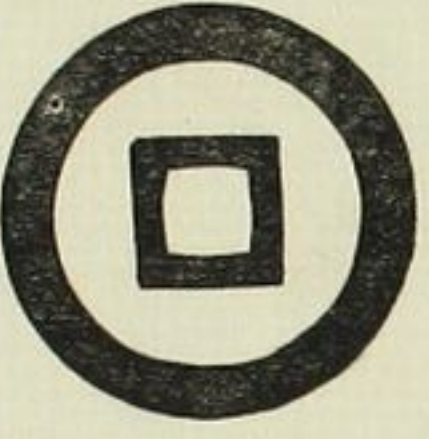
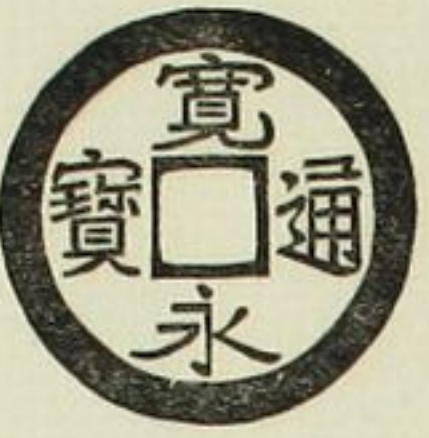
七

同上
菱足寶



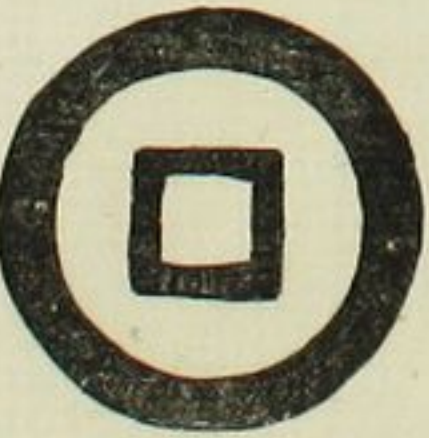
同上
内跳寬

十



十

同上
菱足寶



かくて錢貨は世に充ちたりけん、この後は志ばらく
鑄錢のさたなかりし。

寬永泉志二卷 畢

明治三十一年九月十五日印刷
同年九月二十日發行

定價金五十五錢

著作兼發行者

東京市日本橋區
濱町二丁目十一番地

榎本文四郎

印刷者

東京市淺草區
茅町二丁目十四番地

太田金藏

印刷所 全所

寬永錢研究會印刷所

賣捌所

東京市日本橋區濱町
二丁目十一番地榎本方

寬永錢研究會事務所

守田實丹君題辭
根岸武香君序文
榎本文城君編述
三上香哉君

寬永泉志

壹卷

定價金參拾錢

卷中目錄

- 寬永三年水戸座所鑄錢
 - 寬永十三年水戸座所鑄錢
 - 年月未勘水戸座所鑄錢
 - 年月所鑄座未勘錢
 - 寬永十三年至十七年淺草座所鑄錢
 - 寬永十三年至十七年芝座所鑄錢
 - 寬永十三年至十七年坂本座所鑄錢
- 以上

寬永泉志參卷

近刊

取次販賣所

同	同	同	古錢賣買所
辨慶石町	橫濱市扇町 二丁目四十七番地	錦町一丁目六番地	東京市神田區 田代町十番地
中嶋孝次郎	村松久太郎	橫井仲定	鷺田信詮



